Ⅱ章　調査結果とその考察

◎　報告書では，本章以下すべての章においてベネッセによる調査結果や数値を「全国」，新潟県の調査結果や数値を「新潟県」と表記する。

◎　各質問の回答状況を示す百分率は，整数値になるように調整してある。

Ⅱ章　調査結果とその考察

1　年間指導計画の実施状況

〔全　国〕（平成23年調査）

国語では４割，算数では３割弱の教員が，授業進度に遅れがあると回答

全体では，国語で約６割，社会，算数，理科で７～８割の教員が，年間指導計画通りに進んでいると回答。しかし，１学期の段階で，国語はほとんどの学年で，社会は５年生で，算数は２年生と４年生で，３割を超える教員が「計画より遅れている」と回答。遅れている理由は，国語と社会は分量の多さ，算数は児童間の学力差，理科では観察・実験があげられている。

〔新潟県〕（平成25年調査）

社会，算数，理科では３割弱，国語では２割の教員が，授業進度に遅れがあると回答

全体では，国語で約８割，社会，算数，理科で約７割の教員が年間指導計画通りに進んでいると回答。しかし，調査したすべての学年で遅れが存在。６年生の社会と理科では，約４割の教員が「計画より遅れている」と回答。遅れている理由は，国語と算数は児童間の学力差，社会は分量の多さ，理科では観察・実験があげられている。

Q　授業は年間指導計画通りに進んでいますか（一つに○）

1　計画より早く進んでいる
2　ほぼ計画通りに進んでいる
3　計画より遅れている

調査の集計結果

図１－１　年間指導計画の実施状況（全体）

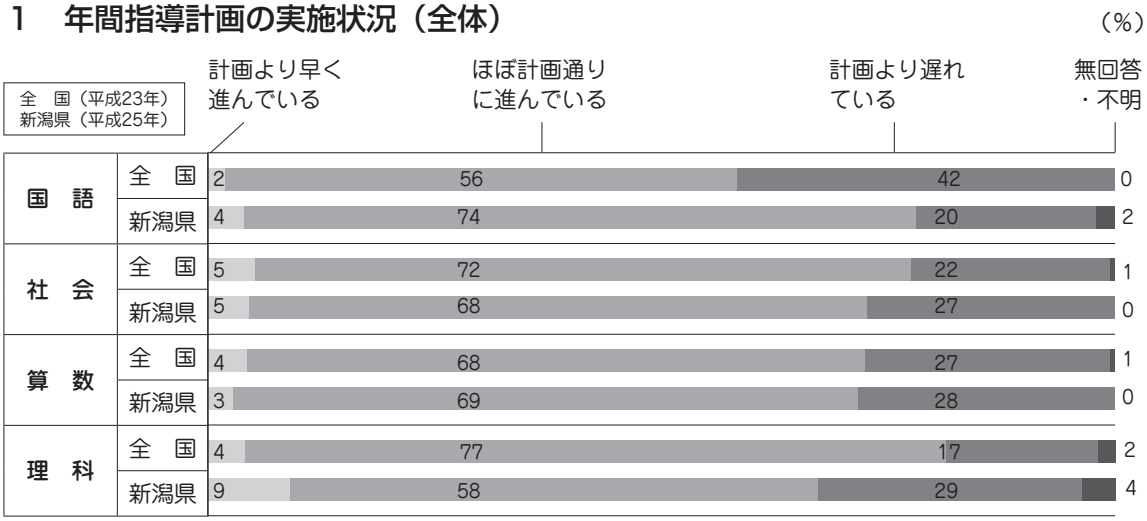


表１　年間指導計画からの遅れ（学年別）

全　国（平成23年）
新潟県（平成25年）

（%）

		１年	２年	３年	４年	５年	６年
国　語	全　国	28	38	52	49	52	34
	新潟県		19		26		16
社　会	全　国			15	11	37	26
	新潟県				14		37
算　数	全　国	20	44	24	34	27	17
	新潟県		26		35		24
理　科	全　国			8	20	7	20
	新潟県				14		43

※「計画より遅れている」の％
※30％以上の数値に網掛をしている。

新潟県教員の回答結果

○　教科（学年）と遅れ（全国との比較）

・国語　　遅れが減少（全体　22％減　　２年減　　４年減　　６年減）
・社会　　遅れが微増（全体　５％増　　４年増　　６年増）
・算数　　遅れが微増（全体　１％増　　２年減　　４年増　　６年増）
・理科　　遅れが増加（全体　12％増　　４年減　　６年増）

新潟県の調査では，全国に比べて遅れは大幅に減少していると予想していた。しかし，約２年後の現在でも依然として遅れが解消していないことが明らかになった。

国語では遅れが大幅に減少し，「計画より早く進んでいる」「計画通りに進んでいる」が８割に達している。算数は，ほぼ全国と同じ状況にある。社会と理科では，遅れがむしろ増加している。

学年別では，国語を除く６年の社会，算数，理科では遅れが全国より増加している。

「教科の遅れ」と「教職経験年数」「勤務校の学校規模」との相関をみたが，顕著な特徴はみられなかった。

調査結果の考察

新教育課程の実施から約２年が経過しているにもかかわらず，遅れが解消されていない実態がある。遅れの有無だけを問題にするのではないが，このような事態は好ましいものではない。学習指導上の大きな課題である。常に先を見通してゆとりのある計画的な学習指導が望まれている。

年間指導計画に対する学習指導の遅れを問題にする場合，二つの側面を考えておく必要がある。一つは，既存の指導計画を尊重しつつも，児童の実態に即した指導を展開しなければならないこと。もう一つは，指導した結果を吟味して，既存の指導計画を修正し，自校化，自学年化，自学級化を図らなければならないことである。

この二点が適切になされたなら，遅れは大幅に減少するものと思われる。

教員には，計画をもとに常に遅れが生じないための具体的な努力と工夫が求められる。

学校行事のために学習指導にしわ寄せが生じたり，教材研究不足から計画が遅延したりすることがないように，時数管理を確実に行うことが求められる。仮に遅れが生じても初期の段階で解決・解消することを心がけたい。

年間指導計画の自校化・自学年化などの解決方法は，個人の努力だけでは限界がある。教科部，学年部など学校の組織的な取組が必要である。特に学習指導要領の改訂や教科書が変更された場合などには，組織的な検討の場と時間を保証する必要がある。

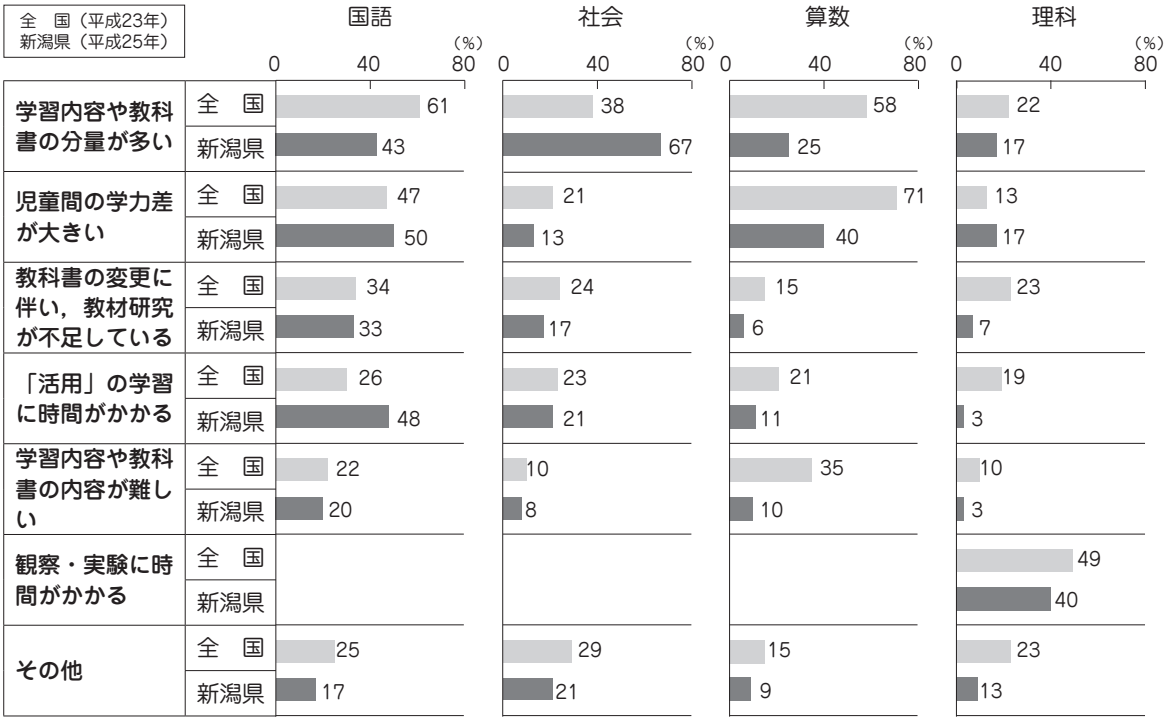
教員の努力にもかかわらず更に遅れが進んだり，児童に学びの成果が見られなかったりした場合は，大きな多忙感とともに疲労感が生じ，それが蓄積していく。教員の様々な悩みは，学習指導上の問題と深くかかわっている。

ＳＱ１　年間指導計画より遅れている理由は何ですか（すべてに○）

1　学習内容や教科書の分量が多い
2　学習内容や教科書の内容が難しい
3　教科書の変更に伴い，教材研究が不足している
4　「活用」の学習に時間がかかる
5　児童間の学力差が大きい
6　その他（具体的に；

調査の集計結果

図１－２　年間指導計画からの遅れの理由



※「計画より遅れている」と回答した教員のみ対象
※複数回答
※国語，社会，算数では「観察・実験に時間がかかる」の項目をたずねていない。

新潟県教員の回答結果

○　遅れの理由（新潟県３位まで）

		新潟県	全国
・国語	児童間の学力差が大きい	50%	(47%２位)
	「活用」の学習に時間がかかる	48%	(26%４位)
	学習内容や教科書の分量が多い	43%	(61%１位)
・社会	学習内容や教科書の分量が多い	67%	(38%１位)
	「活用」の学習に時間がかかる	21%	(23%３位)
	教科書の変更に伴い，教材研究が不足している	17%	(24%２位)
・算数	児童間の学力差が大きい	40%	(71%１位)
	学習内容や教科書の分量が多い	25%	(58%２位)
	「活用」の学習に時間がかかる	11%	(21%４位)
・理科	観察・実験に時間がかかる	40%	(49%１位)
	学習内容や教科書の分量が多い	17%	(22%３位)
	児童間の学力差が大きい	17%	(13%５位)

遅れの理由は，教科によって異なっているが，共通してあげられているのは「学習内容や教科書の分量が多い」「児童間の学力差が大きい」「『活用』の学習に時間がかかる」などである。（理科では「観察・実験に時間がかかる」が遅れの理由第１位としてあげられている）新潟県は，全体としてほぼ全国と同じ傾向である。

部分的な特徴をあげれば，次の点である。

① 「学習内容や教科書の分量が多い」は，全国に比べて割合が低い。しかし，社会だけは高い数値（67%）を示している。

② 「児童間の学力差が大きい」は，算数の数値（40%）が全国と比して著しく低い。

③ 「『活用』の学習に時間がかかる」は，国語の数値（48%）が全国や新潟県の他の教科に比して高い。

④ 理科の「観察・実験に時間がかかる」は，全国と同じ傾向である。

調査結果の考察

遅れの理由は，それぞれにうなずけるものである。確かにそのような困難さや課題が存在することは理解することができる。そうだとしても，学習指導要領の改訂では時間数が考慮され増加されていることからも様々な困難を解決して，計画的にゆとりをもって教育活動を展開することが望まれる。

① 社会の「学習内容や教科書の分量が多い」が特に高いこと

新学習指導要領，新教育課程，教科書の変更等の大きな変化の直後は，変化（質・量・表現等）の違いを敏感に感じるものである。したがって，全国の数値が高いことや新潟県

の数値が全国を下回ることは，調査の時期から理解できる。しかし，新潟県の社会でこの数値が特に高いのはどのような理由なのか。

教科書に盛られている内容をすべて同じように指導しようとすれば，時間不足が生じるのは当然である。年間指導計画はこのような点にも様々な配慮をして作成されているはずではある。すべてを同等に学ばせようとしてはいないか。（次のページからの遅れを取り戻す方法として「重点単元を設ける」を考えている教員がかなり存在するが）社会だけに限らず，あくまでも「教科書を教える」のではなく「教科書で教える」のである。気になる遅れの理由である。

② 算数の「児童間の学力差が大きい」が低いこと

算数は児童の学力差が比較的目に付きやすい，見えやすい教科である。だから，全国の数値が特に高くなることは理解できる。

新潟県の遅れの理由に「学力差」の数値が低いことは，これまでの学習指導や個別指導，少人数指導等の成果の表れだと推測する。

③ 国語の「『活用』の学習に時間がかかる」が高いこと

従来の学習指導やその成果に対する反省から，「習得」「活用」「探求」で培われる学力の相互関係を考慮しながら学習指導を構想し，実践することが課題とされている。教科書の内容は，このことを反映し単元の構成をはじめ活動事例も「活用の学習活動」を意識して編集されている。

社会でも指摘したことであるが，すべてを同じように指導しようとすれば，時間が不足する。児童の実態を考慮して効果的に取り扱うことが望まれる。

一方，この調査結果は「活用の指導」を充実させたいと取り組んでいる教員の意識の表れとみることもできる。

④ 理科の「観察・実験に時間がかかる」が高いこと

全国，新潟県ともに遅れの理由の第一位である。観察・実験は理科の学習指導の中核をなすものだけに省いたり，安易な読解指導に陥ってはならない。新学習指導要領では，観察・実験を「見通しをもって行うこと」や「実感を伴った理解」が求められている。このことから，時間をかけて大切に扱おうとしている結果だとも考えられる。

遅れの原因が「教材研究の不足」や「事前準備の不備」などでなければ幸いである。

学習内容の分量は決められており，それを指導する時間は限られている。したがって，「内容が多すぎる」「時間が足りない」と唱えていても，課題はいつまでも解決しない。解決，解消するには，まず「どのような児童を育てようとしているのか」を明確にすることである。学習指導の面では「どのような学力を有する児童を目標にするのか」「どのような『活用力』『探求力』を期待するのか」などを明確にする必要がある。それらと児童の実態とのとらえとが明確であれば，「分量の多さをどう克服するか」「学力差をより生かす学習指導をどう構想するか」「活用指導の勘所は何か」など諸問題解決の方向や手段，その糸口が見えてくるのではないか。

「教材研究」とは，学習素材の研究をさすだけではなく，このような内容を含んでいるものなのである。

2　年間指導計画の遅れへの対応

〔全　国〕（平成23年調査）

進度を速めたり，重点化することで授業進度の遅れを取り戻す

どの教科でも，１学期の遅れを取り戻す方法として，「進度を速める」ことで対応する割合が約６割～７割ともっとも高く，次に高いのが「重点を置く単元を設ける」という対応。国語では「重点を置く単元を設ける」の比率が６割にのぼる一方で，他の教科では３割前後にとどまり，教科による特性が出ている。

「重点を置く単元を設ける」のは，教職経験年数の長い教員に多く見られる。

〔新潟県〕（平成25年調査）

進度を速めたり，重点化することで授業進度の遅れを取り戻す

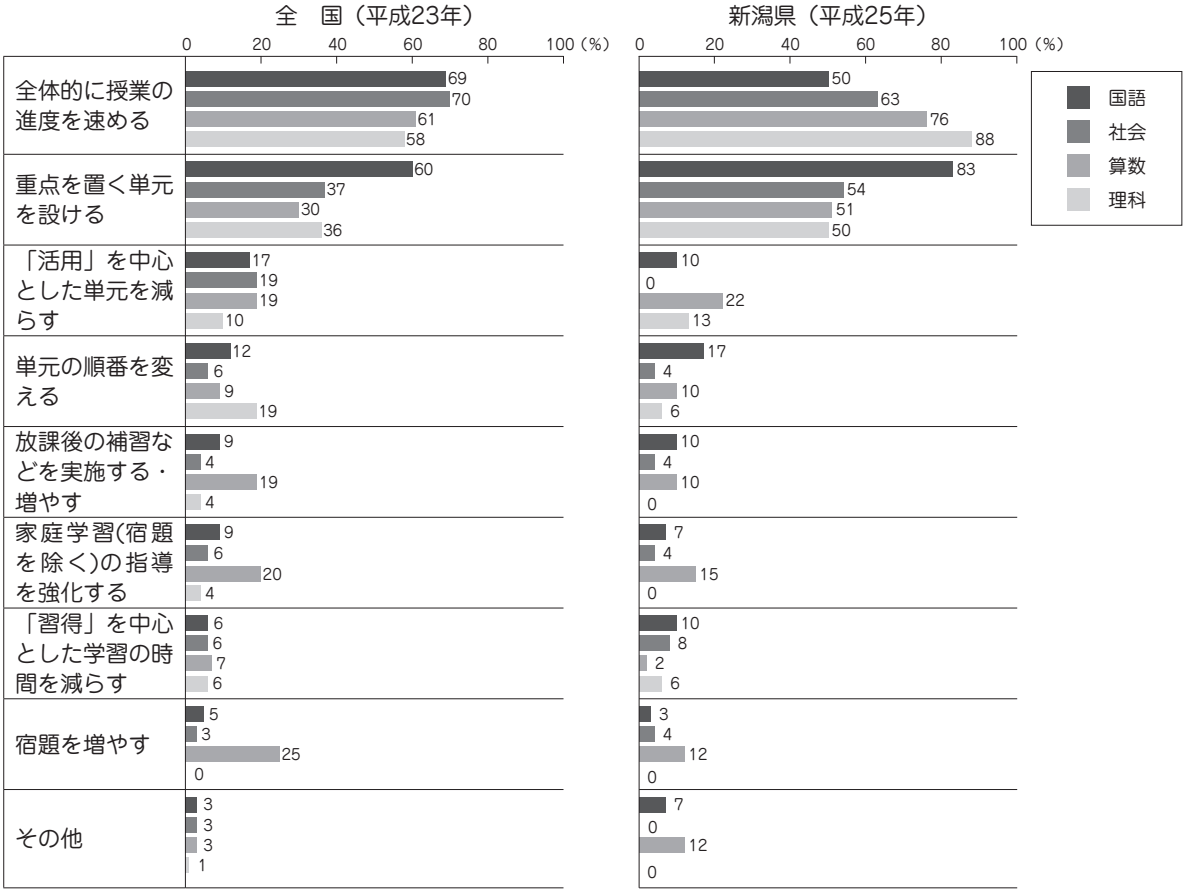
どの教科でも，遅れを取り戻す方法として，「進度を速める」や「重点を置く単元を設ける」ことで対応するが，他の方法を大きく引き離している。

教職経験年数と対応との関係をみると，国語では「重点化」が教職経験年数の長い教員に多く見られる。しかし，算数では「重点化」より「進度を速める」の数値が高く，教職経験年数の差による顕著な特徴は見られない。

Q　計画の遅れについて，今後どのように対応する予定ですか。（すべてに○）

1　重点を置く単元を設ける
2　単元の順番を変える
3　「習得」を中心とした学習の時間を減らす
4　「活用」を中心とした学習の時間を減らす
5　全体的に授業の進度を速める
6　宿題を増やす
7　家庭学習（宿題を除く）の指導を強化する
8　放課後の補習などを実施する・増やす
9　その他（具体的に：

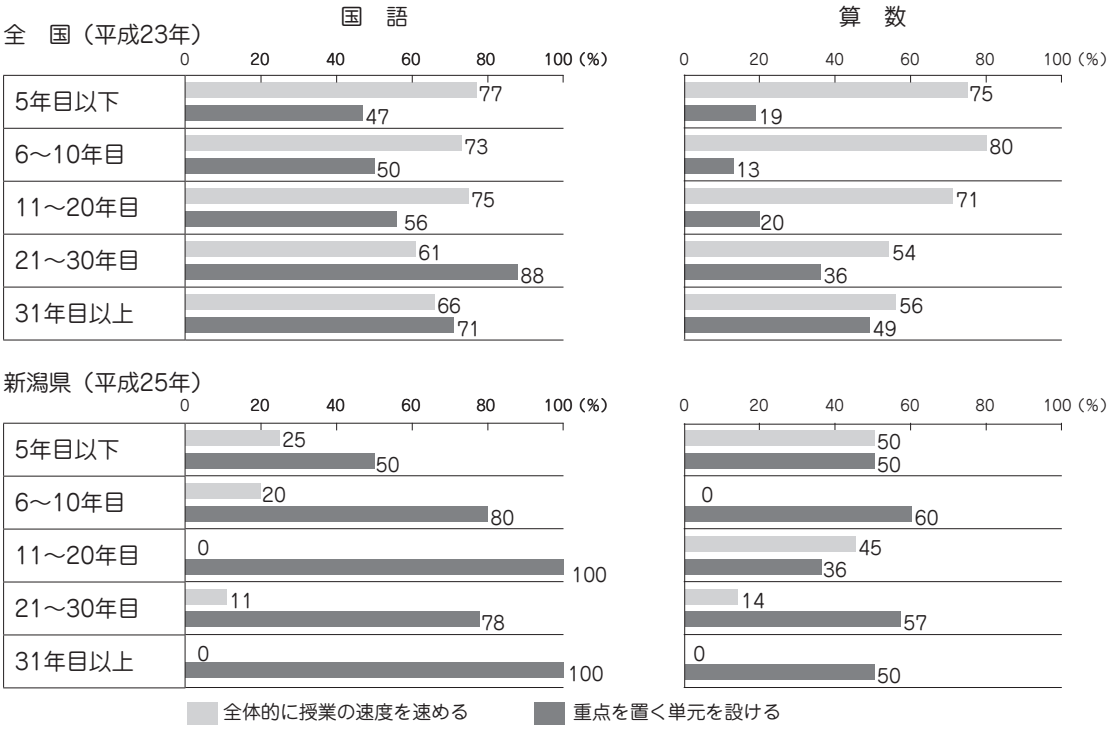
図２－１　年間指導計画の遅れへの対応



※複数回答

※「計画より遅れている」と回答した教員のみ対象

図２－２　年間指導計画の遅れへの対応（教職経験年数別）



新潟県教員の回答結果

計画の遅れに，今後どのように対応するかの問いには

○　全体的に授業の進度を速める

○　重点を置く単元を設ける

この二つの対応が多くの教員に考えられ，実施されていることが分かった。全国の結果とほぼ同じ傾向である。

①　上記二つの対応が他の対応を大きく引き離して選択されている点は同じだが，部分的には以下の違いがある。

	「全体的に授業の進度を速める」		「重点を置く単元を設ける」	
国語	全国69％	新潟県50％	全国60％	新潟県83％
社会	70％	63％	37％	54％
算数	61％	76％	30％	51％
理科	58％	88％	36％	50％

ア　「全体的に進度を速める」は，全国に比べて国語と社会は低く，算数と理科では高い。

イ　「重点を置く単元を設ける」は，すべての教科で全国より高い。

ウ　新潟県で二つの対応を比較すると，国語以外は「全体的に進度を速める」が高い。

②　全国では，算数での「補習（放課後19％，家庭学習20％，宿題25％）を強化する」がそれぞれ約２割程度の教員からあげられている。しかし，新潟県では，「補習（放課後10％，家庭学習15％，宿題12％）を強化する」が低い数値にとどまっている。

③　国語と算数における「遅れへの対応」と「教職経験年数」の相関について，全国では教職経験年数に関係なく「全体的に進度を速める」が多く，経験年数が長くなるにつれて「重点を置く単元を設ける」の数値が高くなる傾向が見られた。

新潟県では，国語，算数ともに教職経験年数が長くなるにつれて「全体的に進度を速める」が少なくなり，「重点を置く単元を設ける」が多くなる傾向が見られた。

調査結果の考察

遅れを取り戻す対応の選択は，新潟県も全国と同じ傾向である。「全体的に授業の進度を速める」と「重点を置く単元を設ける」の二つが他を大きく引き離している。

①　二つの対応は，学習指導としてはかなりの差違を有している。

「全体的に授業の進度を速める」は，どんな内容でもどの活動でも，とにかく時間を短縮する方法である。一方「重点を置く単元を設ける」は，指導内容に応じて児童の実態を考慮し，扱い方や掛ける時間に差をつける方法である。

このように考えると，「全体的に授業の進度を速める」では，結果として指導が表面的な扱いに陥り，児童の身に付ける学力も深まりのないものになる恐れがある。

このことから「重点を置く単元を設ける」を採用し，指導を工夫することが望まれる。新潟県の「重点を置く単元を設ける」がすべての教科で全国の数値を上回っているのは好ましい傾向である。

一方，「全体的に授業の進度を速める」数値が高い教科も存在している。今後の学習指導上の課題である。

② 全国では，遅れを取り戻す方策を授業以外の場面にも求めて活用し，実施しようとしている。

新潟県では，できるだけ授業の中であくまでも自分が対応しようとしている。放課後の時間を生み出すことに困難を感じているのか，自分の責任で処理しようとする意識が強いからと推察される。生真面目な新潟教員気質を感じるが，活用できるものは積極的に活用してもよいのではないか。

③ 若い教員とベテランの教員では，遅れへの対応に違いがあることが調査結果から伺い知ることができた。これは，まさに経験の違いであり，研修歴，研修量と質の違いでもある。経験年数の様々な学校の教職員構成の中で，このことをどのように考え，どのように取り組み，どのような成果を生み出すことが可能なのであろうか。課題であると共に，問題解決の糸口でもあると考える。

このことは，単に遅れの問題に止まらず，多くの学校課題にもかかわる事柄である。職員組織を効果的に生かす学校づくりが求められている。

どのような対応を採るにせよ，深い教材研究あっての指導方法である。その場合以下の事項を考慮して学習指導を具体化することが大切である。

○ 学習内容の系統性・関連性を見極めること
○ 単元の重点化や教材の取扱いの軽重を図ること
○ 教えるべきことと，考えさせるべきことを明確にすること
○ 体験させるべきことと，話し合うべきこと等を明確にすること

遅れを生まないための工夫　（新潟県独自　自由記述）

〔新潟県〕（平成25年調査）

十分な教材研究を前提に，様々な工夫・改善がなされている

遅れを生まないために心がけていることは，「ねらいの明確化」「単元の重点化」「内容の精選」「取扱いの軽重」などがあげられた。「指導計画の改善と活用」「指導方法の工夫」「時数管理の共有化」等もあげられている。

授業以前～授業中～授業後，授業以外と様々な場で多くの工夫や配慮等があげられている。

Q　遅れを生まないために，日ごろから実践している方法や工夫を教えてください。

新潟県教員の回答結果

【　授　業　前　】

教材研究を深める。　　（　）は人数

・単元の重点化を図る(11)，指導内容を精選する（7），教材取扱いに軽重をつける(25)
・ねらい（身に付けさせたい力）を明確化する（7）
・教えることと考えさせることの区別を明確にする（1）
・他教科との関連を考える，横断的に取扱う（3），合科的に扱う（2）
・見通しをもった指導計画の立案，点検。週案を作成する（9）

【　授　業　中　】

上記教材研究の確かな実施

・単位時間の展開を構造化して，児童に学習の見通しをもたせる（1）
・実態を見極め，時間をかけるべきところは十分に時間をかける（1）
・ワークシートの作成，共有化，活用を図る（4）
・ノート指導を徹底する（1），漢字指導をシステム化する（1），音読を重視する（3）

【　授　業　後　】

着実な時数管理

・指導計画を点検しチェックする（7）
・的確な評価と今後の展望をもつ（1）

【　授　業　以　外　】

常時，遅れに心配りを

・学年会で確認する（3），同僚と情報交換をする（6）
・家庭学習，朝学習等を活用する（6）

調査結果の考察

遅れを取り戻すための学習指導は，児童にも教員にも大きな負荷を伴う。それを考えると，遅れを取り戻す指導の前に，遅れを生まない指導が強く望まれる。先に報告した遅れの実態から，遅れを生まない指導は簡単でないことは理解できる。しかし，現に遅れを生まない学習指導を実践している教員が全体の約７割（年間指導計画の実施状況の実態）と数多く存在する。いかにすれば遅れは生じないのか，本調査では，その努力や工夫を自由記述で明らかにした。

その実態と内容をを分かりやすく伝えるために，【授業前】【授業中】【授業後】【授業以外】に分類，整理した。

① 遅れを生まないための教材研究は，上記４場面のいずれでも行われている。

【授業前】　児童の実態から，指導内容をどのように指導するかを構想する。

【授業中】　指導構想を動く授業の中で吟味し，実行する。

【授業後】　指導内容が構想したように児童の身に付いたかどうかを確認する。

【授業以外】上記授業をふまえ遅れに対して，何をどうするか，工夫を明確にする。

特に授業を構想する段階に「遅れを生まないための教材研究」が集中している。

② 「遅れを生まない」ということは，児童が予定された時間内に予定された内容を理解し，身に付けるということにほかならない。そのことが着実になされるための学習指導で着目するべき要素が二つある。

一つは「ねらいが明確であること」，もう一つは，「単位時間」「次」「単元」などでの「まとめが適切に行われること」である。ねらいを明確にすることは多くの報告があった。しかし，まとめについての努力や工夫が報告されなかったのは，まとめの重要性に対する意識が弱いからだと推測する。

③ 数は少なかったが，授業以外の場での工夫や周囲の人たちとの協力が報告されていた。自分だけではややもすると独善になったり，見逃したりすることもあるので，他との情報交換は大切である。

結論を言えば，遅れを生まない努力や工夫の根元は「深い教材研究にある」ということにつきる。逆に浅い教材研究による「遅れを生まない指導」「遅れを取り戻す指導」をいくら繰り返しても，本質的な解決にはなり得ない。なぜなら，それは新学習指導要領が要請している基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等とをバランス良く身に付けることにはならないからである。

現在，遅れで悩んでいる教員に一つの方向を示すとすれば，教材と児童の実態に即した縦横への広い視野からの工夫と判断が解決への足がかりである。遅れの阻止や遅れ解消の方法が見つかったなら，その方法や工夫を同僚と共有し，学校や教室で生かしていくことが大切である。

学習指導要領の改訂は，時期も内容もある程度周知されている。したがって各学校には，この実態をふまえて，年間指導計画の作成と見直しについての「計画的な取組み」を期待したい。

3　心がけている学習や活動

〔全　国〕（平成23年調査）

思考力・判断力・表現力育成を心がける指導が少しずつ広がっている

どの教科でも「習得」を心がけた指導が行われているが，算数では「活用」，国語では「言語活動」への心がけも行われている。思考力・判断力・表現力等の育成にかかわる学習への心がけは教科ごとに異なり，国語では「感じたことを表現する」，算数では「分かりやすく伝える，説明する」，理科，社会では「体験する，調べる」などが特に心がけられている。

〔新潟県〕（平成25年調査）

思考力・判断力・表現力育成を心がける指導が広がっている

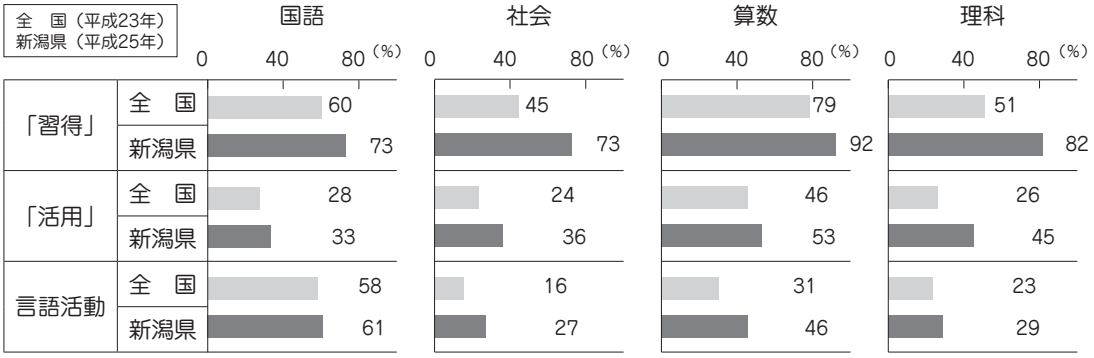
どの教科でも７割以上が「習得」を心がけた指導が行われている。また，すべての教科で「活用」「言語活動」への心がけも行われている。思考力・判断力・表現力等の育成にかかわる学習や活動（28項目＝７項目×４教科）は，25項目が全国を上回っている。特に「事実を正確に理解する」「情報を分析・評価する」「考えをまとめて論述する」「分かりやすく伝える，説明する」「考えを伝え合う，議論する」の５項目は，すべての教科にわたって心がけられている。算数，理科では７項目すべてが心がけられている。

Q　授業では，次の学習や活動をどれくらい心がけていますか。１）～３）のそれぞれについて，あてはまる番号に○をつけてください。

	多くするように特に心がけている	まあ心がけている	あまり心がけていない
１）「習得」	1	2	3
２）「活用」	1	2	3
３）言語活動	1	2	3

調査の集計結果

図３－１　「習得」「活用」，言語活動への心がけ



新潟県教員の回答結果

① 「習得」「活用」「言語活動」すべてが３％～31％全国の数値を上回っている。中でも「習得」はすべての教科で70％以上で，全国の数値を大きく上回っている。

② 「活用」は社会，算数で10％程度上回っている。

③ 「言語活動」が国語で多いのは当然としても，社会，算数，理科においても全国を上回っている。

調査結果の考察

① 「習得」,「活用」，言語活動がすべての教科で全国を上回って心がけられていることは，新指導要領の趣旨を理解し，思考力・判断力・表現力等を育成することを意図して学習指導が展開されていることの表れである。

「習得」を心がける数値が特に高いことは，新教育課程２年経過の中で,「習得」の重要性を学習指導の実践を通して多くの教員が改めて自覚したからと考えられる。

② それと同様に「活用」の必要性も実感できたから心がけている項目の数値が高くなっている。

③ 言語活動は，新指導要領で強調されている活動である。個の学びをより確かなものにしたり，他と比較して考えたり，一般化して共有したりするための活動である。国語だけでなくすべての教科で全国に比べて高い数値であることから，授業に適切に取り入れようとしていることが表われている。

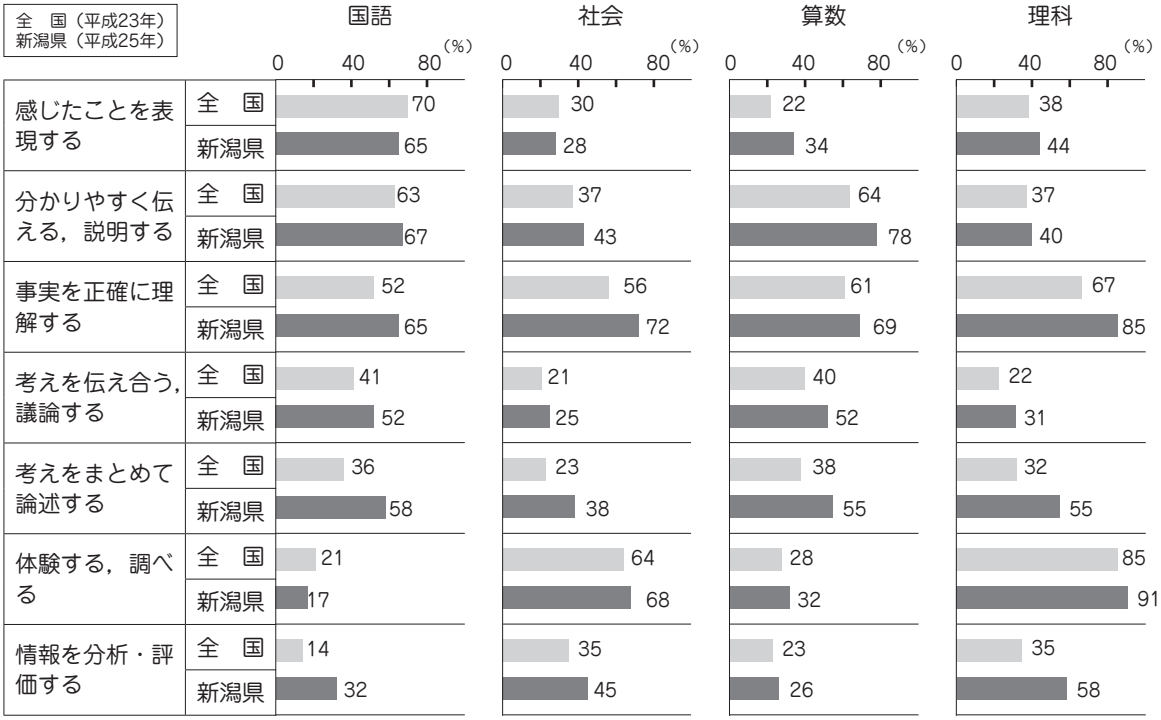
このようなことから，思考力・判断力・表現力等を育成する活動や学習が広がって少しずつ定着してきていると言える。

Q　授業では，次のような学習をどれくらい心がけていますか。1）～7）のそれぞれについて，あてはまる番号に○をつけてください。

	多くするように特に心がけている	まあ心がけている	あまり心がけていない
1）体験する，調べる	1	2	3
2）事実を正確に理解する	1	2	3
3）情報を分析・評価する	1	2	3
4）感じたことを表現する	1	2	3
5）考えをまとめて論述する	1	2	3
6）分かりやすく伝える，説明する	1	2	3
7）考えを伝え合う，議論する	1	2	3

調査の集計結果

図３－２　思考力・判断力・表現力等の育成にかかわる学習への心がけ



※「多くするように心がけている」の％

新潟県教員の回答結果

思考力･判断力･表現力等の育成にかかわる学習の中で「多くするように特に心がけている」と回答したのは，以下の通りである。

①　各教科で最も心がけられている学習

国語　６）「分かりやすく伝える，説明する」　(67％)

社会　２）「事実を正確に理解する」　(72％)

算数　６）「分かりやすく伝える，説明する」　(78％)

理科　１）「体験する，調べる」　(91％)

②　28項目《１）～７）の７項目×４教科》のうち25項目が全国の数値を上回っている。

ア　全国の数値をわずかに下回っている３項目の学習

国語　「感じたことを表現する」－５％　「体験する，調べる」－４％

社会　「感じたことを表現する」－２％

イ　７項目中すべての教科で全国の数値を上回っている学習

２）「事実を正確に理解する」

３）「情報を分析・評価する」

５）「考えをまとめて論述する」

６）「分かりやすく伝える，説明する」
７）「考えを伝え合う，議論する」

ウ　算数，理科では，１）～７）すべての学習が全国を上回っている。

エ　全国を上回る数値が20％以上の学習
国語　５）「考えをまとめて論述する」（22％上回る）
理科　３）「情報を分析・評価する」（23％上回る）
理科　５）「考えをまとめて論述する」（23％上回る）

調査結果の考察

思考力・判断力・表現力等を身に付ける指導が要請されており，全国調査でもその指導が少しずつ広がっていることが確認されている。２年後の新潟県の調査では，ほとんどの項目が全国を上回っており，新学習指導要領で育成しようとする学力を授業で培うことが日常的に心がけられるようになってきている。

① 各教科で選択された最も心がけられている学習は，それぞれの教科の特性を表している。

② 新潟県では，新学習指導要領が目指す学力の育成が実際の学習活動の中で心がけられ，思考力・判断力・表現力等の育成を目指した学習指導が広がっていると言える。しかし，新教育課程実施後の約２年という経過年数を考えたとき，広がりがやや鈍いととらえることもできる。

それは１）～７）の活動や学習が，特別に心がけるようなものでなく，ごく日常的なものになりつつあるということなのかも知れない。

新学習指導要領では「児童の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習指導を重視するとともに言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，児童の言語活動を充実すること」が謳われている。

選択肢にあげられているものは，この趣旨をふまえた学習の具体的な姿である。学習指導充実の要素として授業の中に意図的に適切に組み込み，目指す学力の向上を図りたい。

今後最も心がけていくべき学習活動（新潟県独自）

〔新潟県〕（平成25年調査）

今後心がけるべき学習活動は，「体験する，調べる」「情報を分析・評価する」「伝え合う（説明・議論・論述）」と回答

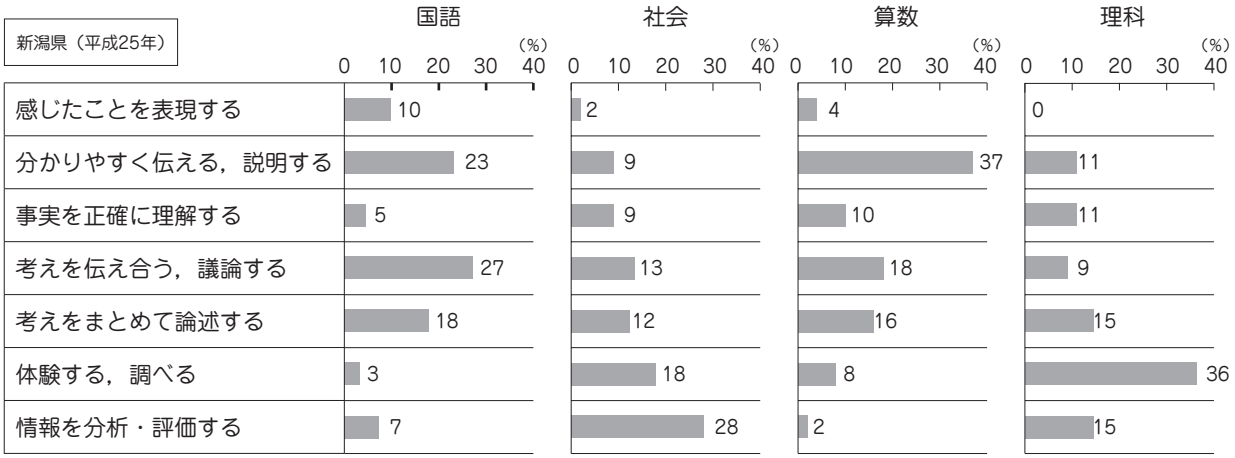
思考力・判断力・表現力等を育成するため，今後最も心がけていくべき活動や学習は，教科によって異なっており，国語では「考えを伝え合う，議論する」社会では「情報を分析･評価する」，算数では「分かりやすく伝える，説明する」理科では「体験する，調べる」があげられている。

Q 「思考力・判断力・表現力」を培うために，児童の実態や指導・学習活動の評価から，今後１）～８）の学習活動の中で，最も心がけていく必要を感じているものを１つ選び，それに○をつけ，それを選んだ理由を聞かせてください。

１）体験する，調べる
２）事実を正確に理解する
３）情報を分析・評価する
４）感じたことを表現する
５）考えをまとめて論述する
６）分かりやすく伝える，説明する
７）考えを伝え合う，議論する
８）その他（　　）

調査の集計結果

図３－３　思考力・判断力・表現力を培うために，今後最も必要と感じている学習活動



新潟県教員の回答結果（国語）

「考えを伝え合う，議論する」	27%
「分かりやすく伝える，説明する」	23%
「考えをまとめて論述する」	18%
上位の合計	68%

1「考えを伝え合う，議論する」を選択した理由　※（　）内は人数

① 思考力・判断力・表現力を高めていく必要があるから	(14)
② コミュニケーション能力（伝える力）を高める必要があるから	(11)
③ 児童が今後生きていくために欠かせない力（生きる力）だから	(5)
④ すべての教科で必要，児童の実態から	(2)

2「分かりやすく伝える，説明する」を選択した理由

① コミュニケーション能力（伝える力）を高める必要があるから	(10)
② 児童の実態（弱さ）から	(7)
③ 思考力・判断力・表現力を高めていく必要があるから	(5)
④ 児童が今後生きていくために欠かせない力（生きる力）だから	(3)

3「考えをまとめて論述する」を選択した理由

① 児童の実態（弱さ）から	(9)
② 思考力・判断力・表現力を高めていく必要があるから	(8)
③ すべての教科で必要，Ｂ問題に対応できる力だから	(6)

調査結果の考察

新学習指導要領小学校国語の目標は「国語を適切に表現し，正確に理解する能力を育成し，伝え合う力を高めるとともに，思考力や想像力及び言語感覚を養い，国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」である。

選択された今後心がけるべき学習は，ある一つの学習に集中せず，いくつかが選択されてはいるが，いずれもコミュニケーション能力の育成を目指したものである。それは前問いの「現在心がけている学習」ともほぼ同じ内容である。しかし，内容をよく吟味すると，現在より更に質的に一段階進化したものになっている。それは国語科の目的である「伝え合う力の育成」と重なっており，この選択の結果はうなずける妥当なものである。

児童の実態を十分に考慮しながら，新学習指導要領・新教育課程で目指している思考力・判断力・表現力等を育成し，コミュニケーション能力を高めようとする意思が選択した理由に凝縮されている。

国語科は，対象が母国語であることや，他の教科を学ぶ基礎を担っていることなどを自覚し，着実で充実した学習指導が展開されることを期待したい。

新潟県教員の調査結果（社会）

「情報を分析・評価する」	28%
「体験する，調べる」	18%
「考えを伝え合う，議論する」	13%
上位３番目までの合計	59%

１　「情報を分析・評価する」を選択した理由　　※（　）内は人数

①　社会科では，資料からいろいろな情報を読み取ることが大切だと思うから　(10)
②　情報の分析・評価を行うことが思考力・判断力・表現力を高めると思うから（４）
③　正しい情報，必要な情報を選択するために必要だと思うから　（４）

２　「体験する，調べる」を選択した理由

①　見学・調査・体験などの活動には，児童が関心・意欲をもって取り組むから（12）

３　「考えを伝え合う，議論する」を選択した理由

①　確かな根拠に基づく討論が，思考力・判断力・表現力を培うから　（３）
②　情報を読み取り，それを活用して話し合う場面が大切だから　（２）
③　双方向のかかわりから，新たな視点を得て学びを深めることができるから　（２）

調査結果の考察

今後最も心がけていくべき社会科の学習として最も回答が多かったのは，「情報を分析・評価する」であった。社会的事象の情報を分析・評価する学習活動が，思考力・判断力・表現力を培う重要な働きをする活動であると認識されたことが，選ばれた理由である。

（１－①・②参照）

その上で，言語活動の充実という改訂のポイントを考えると，授業が情報の読み取りだけに終始することなく展開されることが望ましい。授業では，情報の収集，情報の報告を含めた活動の中で，思考力・判断力・表現力を培う様々な活動が展開されることが期待される。

（社会的事象の情報収集）⇒（情報の読み取り）⇒（情報の報告）

また，１－③も重要な指摘である。情報過多の現代，正しい情報，必要な情報を確かに選択できる分析・評価の力を培うことは重要である。

次に回答が多かった「体験する，調べる」も，教育課程実施上の配慮事項にその必要性が繰り返し述べられている重要な学習活動である。特に社会科では，観察や調査・見学・表現活動など体験的な活動が多い。これらの活動は，どの学年にとっても，興味と関心を高める大切な学習活動になっている。

三番目に回答が多かった活動は，「考えを伝え合う，議論する」である。この活動は，すべての学習のまとめ段階で，確かな表現力を培うことが期待される。

新潟県教員の調査結果（算数）

「分かりやすく伝える，説明する」	37%
「考えを伝え合う，議論する」	18%
「考えをまとめて論述する」	16%
上位３位の合計	71%

1 「分かりやすく伝える，説明する」を選択した理由　※（　）内は人数

① 分かりやすく伝える，説明することによって思考力が深まるから　(21)

② 分かりやすく伝えたり，説明したりする力が不足しているから　(10)

③ 多様な考えが出てくる教科の特性から，必要である　（3）

2 「考えを伝え合う，議論する」を選択した理由

① 多様な考えの中で自分の思考力が鍛えられるから　（9）

② 考えを伝え合い，議論することは，思考力・判断力・表現力を深めることに有効であるから　（4）

3 「考えをまとめて論述する」を選択した理由

① 論理的な思考力を深めるために必要だから　（5）

調査結果の考察

新学習指導要領の算数科の目標は，「～数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け，日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え，表現する能力を育てるとともに～」であり，日常言語，数，式，表，グラフなど様々な表現手段を用いて考えたり，自分の考えを分かりやすく説明したり，互いに自分の考えを表現し伝え合ったりする学習活動を充実することが求められている。

このことを受けて，今後の学習活動の中で最も心がけていく必要を感じているものとして最も回答が多かったのが，「分かりやすく伝える，説明する」であった。これは，言語活動を重視しており，改訂の趣旨を十分ふまえた選択とみることができる。

次に回答が多かった「考えを伝え合う，議論する」，三番目に回答が多かった「考えをまとめて論述する」は，「考えを伝え合う」「考えをまとめて論述する」といった言語活動を伴いながら，多面的に考えたり，根拠を明らかにして筋道を立てて体系的に考えたりして，思考を深めていく学習活動である。これらも，新学習指導要領の改訂の趣旨に沿ったものである。

これらの学習活動を日々の授業で確実に展開し，新学習指導要領が目指している思考力・判断力・表現力を一層高めることを期待したい。

新潟県教員の調査結果（理科）

「体験する，調べる」	36%
「考えをまとめて論述する」	15%
「情報を分析・評価する」	15%
上位３位の合計	66%

1「体験する，調べる」を選択した理由　※（　）内は人数

◎　理科学習では欠かせないものだから

- まず体験がないと，思考も判断もしようがないから（4）
- 理科好きな児童を育てることになるから（3）
- 理解が深まり，思考力・判断力・表現力のもとになるから（1）
- 驚き，感動が学習意欲につながり，理解が深まるから（1）

2「考えをまとめて論述する」を選択した理由

- 思考力・判断力・表現力を育成する。（児童の弱点という実態）（3）
- 実験をもとに，部分的な知識・理解をつなげて考え，書くことは大切だから（1）
- 既習事項をもとに事象を論じることが大切だから（1）
- 「考えを話し合う，議論する」まで高めたいから（1）

3「情報を分析・評価する」を選択した理由

- 複数の実験結果をつなぎ合わせて考察する力が必要。それが弱い実態だから（3）
- ただ調べるだけでなく，調べた結果からどう考察（考える）かが大切（2）
- 理科は観察・実験が生命線，それをきちんと分析する力が必要だから（1）

※　多くの学級担任が理科の学習指導を担当していない実態から，理由の人数が少なくなっている。

調査結果の考察

今後最も心がけるべき活動や学習として「体験する，調べる」が４割を占める。

理科の特性から当然の結果である。理科の学習指導では「観察・実験」が適切に行われることがまず前提になっている。

新学習指導要領小学校理科の目標は,「自然に親しみ,見通しをもって観察,実験などを行い,問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに，自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り，科学的な見方や考え方を養う。」となっている。

単に「観察・実験」を実施するだけでなく，児童に観察・実験の見通しをもたせるには，事前の学習指導をどう展開するか。実感を伴った理解に導くには，観察・実験結果をどう理解させ，どのように検討させ，どう一般化したらよいか，などを「言語活動」を取り入れて工夫する必要がある。選択した諸理由にこのような意図が込められていることを伺うことができた。「観察・実験」を中核にした着実な充実した学習を通して，新学習指導要領の強調点である思考力･判断力･表現力等の育成を図り，ひいては理科の好きな児童に育てることを期待したい。

4　宿題と家庭学習

〔新潟県〕（平成25年調査）

ほとんどの教員が宿題を出し，家庭学習をするよう指導している

宿題を出している教員は98％で，１日あたり平均で33分学習するよう指導をしている。

家庭学習をするよう指導している教員は95％で，平日に１日あたり平均で47分学習するよう指導をしている。休日に１日あたり平均で46分学習するよう指導をしている。

Q　あなたは，どのくらい宿題を出していますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1　毎日出す
2　２，３日に１回くらい出す
3　週に１回くらい出す
4　月に１回くらい出す
5　宿題はほとんど出さない

ＳＱ１　あなたが出す宿題は，平均的な児童にとってだいたい１日何分くらいの量ですか。

15分　　30分　　45分　　１時間　　それ以上

ＳＱ２　宿題としてどのような内容のものを出していますか。

１）～６）のそれぞれについて，あてはまる番号に○をつけてください。

	よく出す	たまに出す	あまり出さない	まったく出さない
１）計算の反復的な練習	1	2	3	4
２）漢字の反復的な練習	1	2	3	4
３）音読	1	2	3	4
４）調べ学習	1	2	3	4
５）作文やレポート	1	2	3	4
６）授業でやり残した作業や課題	1	2	3	4

ＳＱ３　ＳＱ２の１）～６）以外に，最近，出すようにしている宿題があれば教えてください。

（　　）

Q　あなたは，受け持ちの児童に対して家庭での学習時間の指導をしていますか。

1　はい
2　いいえ

ＳＱ１　ふだん何時間くらい学習するように指導していますか。平日の平均をお答えください。

15分　　30分　　45分　　１時間　　１時間30分　　２時間　　それ以上

ＳＱ２　休日には何時間くらい学習するように指導していますか。

15分　30分　45分　１時間　１時間30分　２時間　それ以上

ＳＱ３　どのような内容を行うよう指導していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1　内容の指導はしていない
2　計算の反復的な練習
3　漢字の反復的な練習
4　読書
5　日記
6　調べ学習
7　作文やレポート
8　その他（具体的に：

表２　宿題と家庭学習の指導

	宿　　題		家庭学習(平日)		家庭学習(休日)（※新潟県独自）
	宿題を出している教員	１日あたりの量（平均時間）	家庭での学習時間の指導をしている教員	１日あたりの量（平均時間）	１日あたりの量（平均時間）
全　国（平23）	98%	36分	75%	44分	
新潟県（平25）	98%	33分	95%	47分	46分

※宿題の平均時間は，宿題を出している（「毎日出す」～「月に１回くらい出す」）と回答した教員に，「あなたが出す宿題は，平均的な児童にとってだいたい１日何分くらいの量になりますか」とたずねた結果。「15分」を15分,「それ以上」を75分のように置き換えて，無回答･不明を除いて算出している。家庭学習の平均時間は，受け持ちの児童に対して家庭での学習時間の指導をしている（「はい」）と回答した教員に，「ふだん何時間くらい学習するように指導していますか」とたずねた結果。算出方法は宿題と同様。

新潟県教員の回答結果

○宿題を出している教員の割合と一日あたりの量
　教員の割合　　98％（全国と同じ）
　一日あたりの量　33分（全国36分より３分少ない）
○平日に家庭学習を指導している教員の割合と一日あたりの量
　教員の割合　　95％（全国75％より20％多い）
　一日あたりの量　47分（全国44分より３分多い）
○休日の一日あたりの量（新潟県独自の調査）
　一日あたりの量　46分（平日47分より１分少ない）

宿題を出している教員の割合と一日あたりの量は，全国とほぼ同数である。家庭学習を指導している教員の割合は全国を20％も上回っている。一日あたりの量は，平日では全国平均と同程度である。

調査結果の考察

宿題に関する指導は，指導している教員の割合・一日あたりの量とも全国と比べて大した違いはなく，全国の教員と同じ努力をしていると言える。

家庭学習に関しては，新潟県では指導している教員は全国よりも20％も多く，ほとんどの教員が指導している結果が出た。これは，新学習指導要領の趣旨に沿って，児童の自律した学習習慣を付けようと取り組んだ結果と評価することができる。

家庭で学習するよう求めている一日あたりの量は，平日ではほぼ全国並みであった。

平成24年の全国学習状況調査で，新潟県での平日に１時間以上家庭学習をしている児童の割合は全国を上回っていたが，休日に１時間以上家庭学習をする児童の割合は少ないという結果が出ている（「分かる授業づくり」平成24年　新潟県教育委員会）。これについて，新潟県の教員が休日の家庭学習の量をどのように設定いるのかを調べるためにＳＱ２を設けた。その結果，休日は平日より多めに学習するようには指導してはいないことが分かった。

参考資料

宿題として「よく出す」内容（複数回答）

1	計算の反復的な練習	93％
2	漢字の反復的な練習	84％
3	音読	53％
4	調べ学習	11％
5	日記	10％

家庭学習をするよう指導している内容（複数回答）

1	計算の反復的な練習	94％
2	漢字の反復的な練習	94％
3	読書	64％
4	日記	52％
5	調べ学習	46％

5　児童の変化

〔全　国〕（平成23年調査）

児童の疲れの増加や学力格差の拡大がみられる

児童の変化をたずねたところ，教員は，思考力・判断力・表現力等にかかわる児童の変化として，「分かりやすく伝えたり，説明できる児童」「感じたことを表現できる児童」の増加を感じているが，３割弱にとどまる。「疲れている児童」「授業についていけない児童」の増加や「児童間の学力格差」の拡大は，２～４割の教員が感じている。

〔新潟県〕（平成25年調査）

教員は学力水準が高まったと感じており，その割合は全国を上回っている

「分かりやすく伝えたり，説明できる児童」の増加を感じているが４割，「思考力・判断力・表現力が育っている」が４割弱，「感じたことを表現できる児童」「考えをまとめて論述できる児童」が３割，「考えを伝え合ったり，議論できる児童」「基礎的･基本的な知識･技能の『習得』が十分にできている児童」が３割弱である。

Q　新学習指導要領の実施によって児童はどのように変わってきていると思いますか。
１）～14）のそれぞれについて，あてはまる番号に○をつけてください。

１）基礎的・基本的な知識・技能の「習得」が十分にできている児童	増えた 1	変わらない 2	減った 3
２）思考力・判断力・表現力が育っている児童	1	2	3
３）事実を正確に理解できる児童	1	2	3
４）情報を分析・評価できる児童	1	2	3
５）感じたことを表現できる児童	1	2	3
６）考えをまとめて論述できる児童	1	2	3
７）分かりやすく伝えたり，説明できる児童	1	2	3
８）考えを伝え合ったり，議論できる児童	1	2	3
９）学習意欲のある児童	1	2	3
10）学習習慣がついている児童	1	2	3
11）授業についていけない児童	1	2	3
12）疲れている児童	1	2	3
	高まった	変わらない	低くなった
13）児童集団の学力水準	1	2	3
	大きくなった	変わらない	小さくなった
14）児童間の学力格差	1	2	3

図５－１　児童の変化①（思考力・判断力・表現力等の育成に関わる学習）

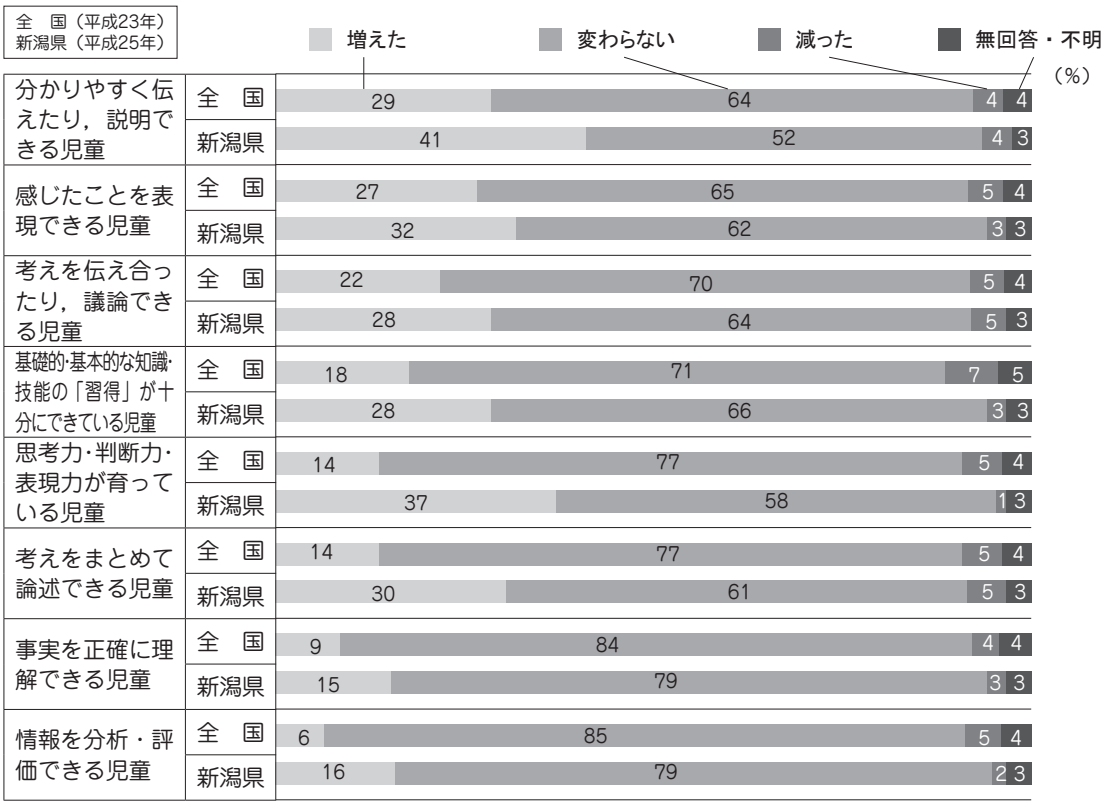
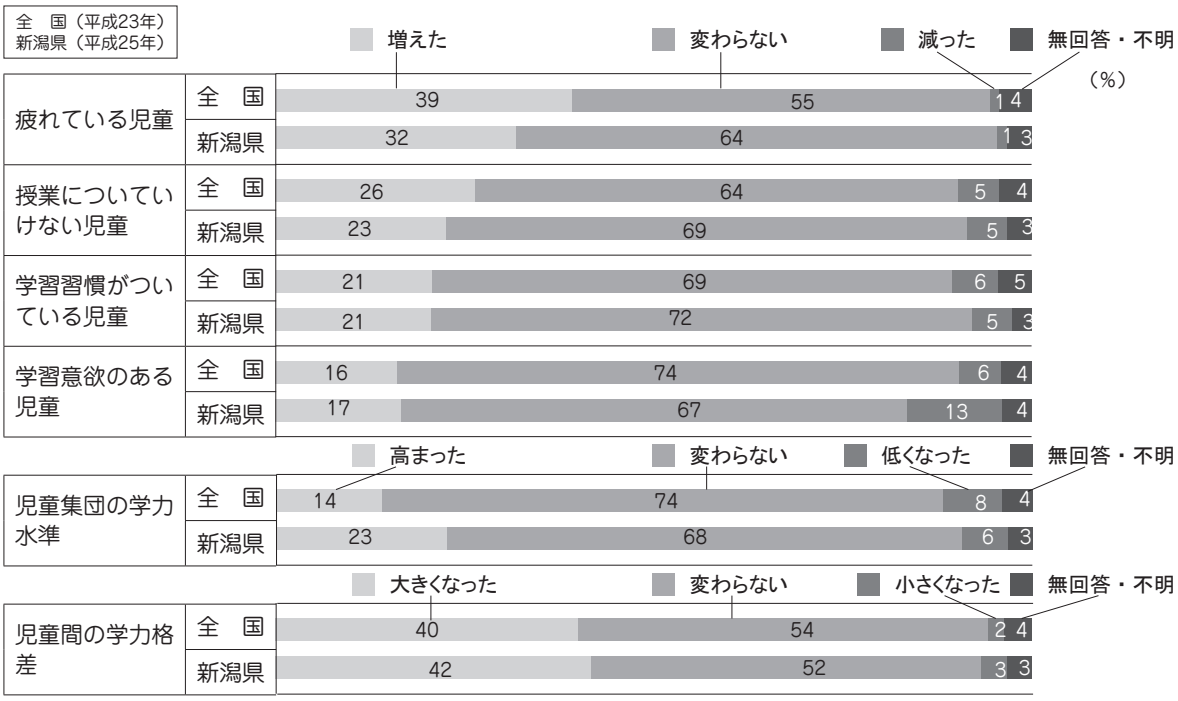


図５－２　児童の変化②　（疲れ，授業理解，学習意欲，学力格差など）



新潟県教員の回答結果

※数値は全国との比較の結果を表している。

（1）	分かりやすく伝えたり，説明できる児童	（増えた	＋12％	減った	±０％）
（2）	感じたことを表現できる児童	（増えた	＋５％	減った	－２％）
（3）	考えを伝え合ったり，議論できる児童	（増えた	＋６％	減った	±０％）
（4）	基礎的・基本的な知識・技能の「習得」が十分にできている児童	（増えた	＋10％	減った	－４％）
（5）	思考力・判断力・表現力が育っている児童	（増えた	＋23％	減った	－４％）
（6）	考えをまとめて論述できる児童	（増えた	＋16％	減った	±０％）
（7）	事実を正確に理解できる児童	（増えた	＋６％	減った	－１％）
（8）	情報を分析・評価できる児童	（増えた	＋10％	減った	－３％）
（9）	疲れている児童	（増えた	－７％	減った	±０％）
(10)	授業についていけない児童	（増えた	－３％	減った	±０％）
(11)	学習習慣がついている児童	（増えた	±０％	減った	－１％）
(12)	学習意欲のある児童	（増えた	＋１％	減った	＋７％）
(13)	児童集団の学力水準	（高まった	＋９％	低くなった	－２％）
(14)	児童間の学力格差	（大きくなった	＋２％	小さくなった	＋１％）

新潟県の教員は，児童に力が付いていることを感じており，その割合はベネッセの全国調査より若干上回っている。しかし，学習意欲のある児童が減ったと感じている教員の割合は全国を上回っている。

回答結果の考察

全国に比べて10％以上伸びている項目を挙げると,「分かりやすく伝えたり,説明できる児童」「基礎的・基本的な知識・技能の『習得』が十分にできている児童」「思考力・判断力・表現力が育っている児童」「考えをまとめて論述できる児童」「情報を分析・評価できる児童」である。中でも,「思考力･判断力･表現力が育っている児童」や「考えをまとめて論述できる児童」が増えたと感じている教員の割合が，全国をかなり上回っている。これは，Ｐ14の「現在心がけている学習」やＰ16の「今後最も心がけていくべき活動や学習」の結果にも示されるように，新学習指導要領の趣旨に沿って言語活動を活発にし「伝え合う力の育成」に努とめたために児童が伸びているとみることができる。

また,「疲れている児童」が全国に比べて７％も減っている。これは，新学習指導要領実施後２年が経過して，授業時数増のために学校がとった学期始めや学期末の短縮授業を減らすことや，休憩や給食時間の取り方の工夫などの時間割設定の工夫に慣れてきたということもあるが，新潟県の教員が児童の負担軽減のために配慮した結果でもあると思われる。

一方,「学習意欲のある児童」が減った割合が，全国より多くなっているのが気になる。学習意欲のわかない指導のどこに問題があるのかを振り返り，学習意欲を増すよう指導の工夫をすることが望まれる。

6　教員の悩み

〔全　国〕（平成23年調査）

教材研究の時間や「探究」に対する取り組みの不足などに悩んでいる

教材研究・教材準備の時間の不足については９割以上の教員が，「探究」に対する取り組みの不足，学力が低い児童の学習意欲を保つことの難しさ，児童間の学力差などについては７割以上の教員が感じている。「年間の授業時数が足りない」と感じている教員は，約５割である。

〔新潟県〕（平成25年調査）

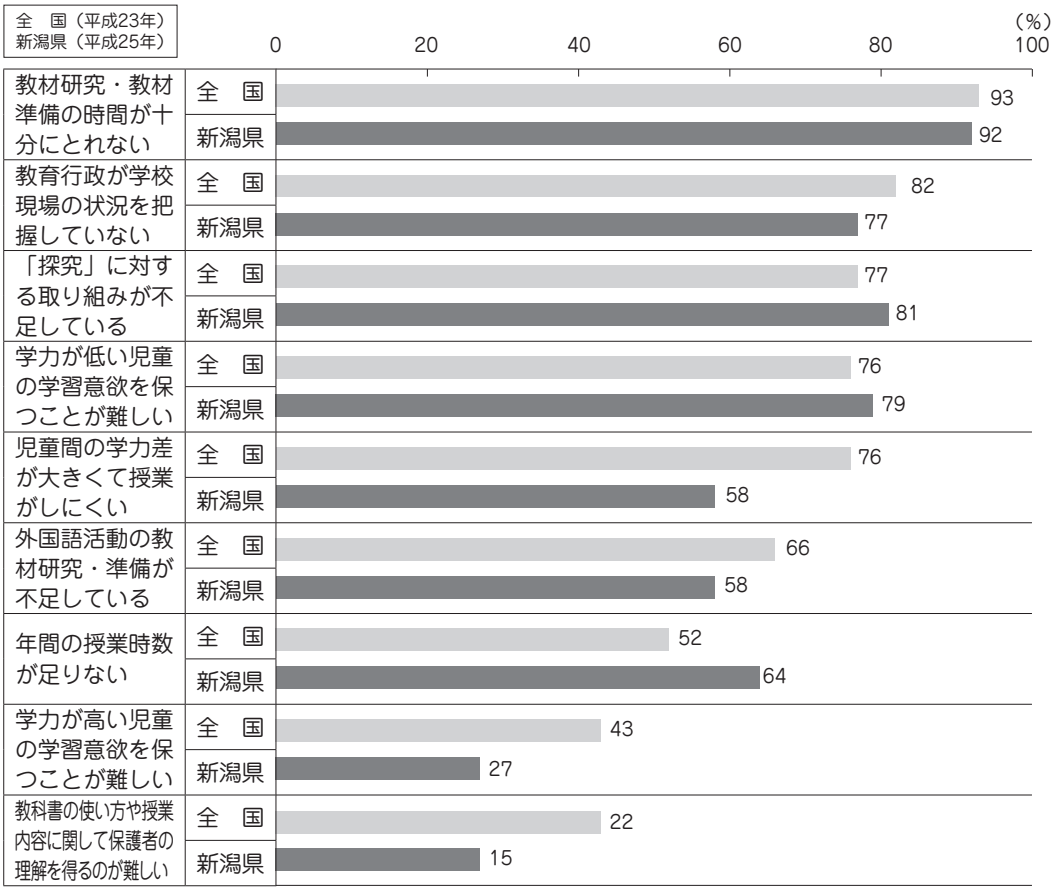
教材研究・教材準備の時間がとれない，授業時数が足りないなど，時間不足に悩んでいる

「教材研究･教材準備の時間がとれないこと」は，９割以上の教員が悩んでいる。次いで，「探究に対する取り組み不足」「学力が低い児童の学習意欲を保つこと」の難しさを８割の教員が悩んでいる。共通するのは時間不足である。

Q　あなたは次のような悩みをどれくらい感じていますか

図６－１　教員の悩み

※（１）～（９）は，全国調査で割合が高かった項目順に並べてある。



新潟県教員の回答結果

（新潟県と全国との比較）

（１）	教材研究・教材準備の時間が十分にとれない	92％	（全国93％より１％低い）
（２）	教育行政が学校現場の状況を把握していない	78％	（全国82％より４％低い）
（３）	探究に対する取り組みが不足している	81％	（全国77％より４％高い）
（４）	学力が低い児童の学習意欲を保つことが難しい	80％	（全国76％より４％高い）
（５）	児童間の学力差が大きくて授業がしにくい	58％	（全国76％より18％低い）
（６）	外国語活動の教材研究・準備が不足している	58％	（全国66％より８％低い）
（７）	年間の授業時数が足りない	64％	（全国52％より12％高い）
（８）	学力が高い児童の学習意欲を保つことが難しい	28％	（全国43％より15％低い）
（９）	教科書の使い方や授業内容に関して保護者の理解を得るのが難しい	15％	（全国22％より７％低い）

新潟県の悩みを感じている教員の割合は，ほとんどの悩みでベネッセの全国調査結果の時点と変わらない高い数値になった。

児童の教育活動に直接かかわる（１）・（３）・（５）の三つの悩みについて，悩んでいると回答した教員に理由を聞いた。

ＳＱ．１　教材研究・教材準備の時間が十分にとれない理由は何ですか

①	授業以外の分掌事務に時間がとられる	34％
②	外部からの調査や報告の要請に追われる	30％
③	配慮の必要な児童の保護者との連絡相談に時間がかかる	16％
④	会議が多い	12％
⑤	その他	８％

分掌事務（34％）や学校外部からの報告要請（30％）が大きな理由である。どんな職でも必要な事務はあり，誰かが分掌しなければならない。しかし，そのために教員の本務である授業に支障を来すことがあってはならない。普段から分掌事務の効率的な処理を工夫すること，同時に教科の専門性を高める研修に積極的に取り組み，教材研究・教材準備が能率的に進められる力量を磨くことを大切にしたい。

ＳＱ．２　［探究］に対する取組が不足している理由は何ですか

① 「習得」・「活用」で授業時数がいっぱいになる　33%
② 「探究」の単元を一人で開発するのは難しい　26%
③ 「探究」は指導の構想・準備に時間がかかる　23%
④ 「活用」「探究」について，教員間の理解が不足している　18%

「探究」の学習活動は，「習得」・「活用」の基盤の上に成り立つ活動であり，活動のための準備が，教員にも児童にもまだ十分できていないことが取組不足の理由である。毎日のくらしの中にテーマを見いだし，地道に着実に気づきを積み上げていく活動を工夫していくことを大切にしてはどうか。

ＳＱ．３　児童間の学力差が大きくなった理由は何ですか

① 教材研究・教材準備に時間がかかり，個別指導の時間がとれない　27%
② 個に応じた指導のための学校体制が不十分　21%
③ 授業の遅れを取り戻すため，授業の進度を速めた　18%
④ 「活用」の学習に時間がかかり，「習得」の学習が不十分　16%
⑤ その他　18%

児童の学力向上を支える①～④の学習活動が，どれも不十分な状況であったことが理由である。学力差を広げないためには，繰り返し学習の継続が望まれる。

三つの悩みに共通した理由は，学校体制や全教員の共通理解の不足など，個人の工夫や努力だけでは効果的な対応ができない悩みであることが回答されている。

調査結果の考察

今回の新潟県教員を対象にした調査は，ベネッセの全国調査から約２年後に実施された。この間新潟県の小学校では，指導計画の見直しや改訂の趣旨を受けた授業改善の取組も進み，教育現場は次第に落ち着きを取り戻し，教員の悩みも少しずつ解消の方向に向いているのではないかと予想していた。しかし，今回の新潟県小学校教員のアンケート調査で，悩んでいる教員の割合がベネッセによる全国調査の数値とほとんど変わっていないことが明らかになった。ベネッセの調査は，新教育課程の本格実施直後の数値である。改訂に伴う様々な教育課題へ対応しなければならない教員にとって，悩みの尽きない時点での高い数値であった。それから約２年後の新潟県小学校教員が，いまだ同じ悩みを感じながら課題の改善がいっこうに進まず，困難な状況を乗り越えることができないでいることになる。

しかし，目の前の教育課題に真剣に取り組みながら悩みを感じている教員が多いことは，問題なのか。これは簡単には判断できない。悩むということは，物事を真剣に見つめ何とかしなくてはと本気で考えるときの人間の心理である。とするならば，悩む対象があり真剣に悩む人が大勢いることは，むしろ大事なことである。悩みの数値では大きな改善は見られないが，アンケートに悩みの本音で回答した新潟県小学校教員の真剣な対応を心強く感じた。

児童の学力の高まりを実感し，（図５－２児童の変化②）更なるがんばりと創意工夫に前向きに取り組む新潟県の小学校教員が，その力を結集し一日も早く困難な状況から抜け出して，意欲的で充実した教育活動を進めていくことを期待したい。

工夫と努力の情報コーナー

アンケートの回答者に，新教育課程の教育活動を進める中で出会った様々な困難な状況と，それを乗り越えるために工夫したこと努力したことを自由に記述してもらった。記述された悩みは，学習活動，教員の勤務状況，児童間の学力格差など様々である。

それを困難な状況ごとにまとめたものが「工夫と努力の情報コーナー」である。

どの情報も，回答者が日々の教育活動に真面目に取り組み，本気で悩んだ末に考え出した工夫や努力である。これを読んで，自分と同じ困難な状況の中でがんばっている仲間がこんなにもたくさんいることを知って，ほっとする人がいるかもしれない。なるほど，こんな工夫や努力があったのか。自分も早速明日からやってみようと思い立つ人がいるかもしれない。「工夫と努力の情報コーナー」が現場教員の道しるべとなり，これからの新潟県の小学校教育を推進する大きな力になることを願っている。

〔寄せられた悩みの概容〕

	回答者数	116名
○　新しい学習活動（習得・活用・探究）へどう取り組むか	41名	36％
○　教材研究をする時間がない。	22名	19％
○　教員はここまで多忙	16名	14％
○　児童間の学力差が広がる	14名	12％
○　授業時数が足りない	11名	９％
○　学力数値目標の重圧	４名	３％
○　その他	８名	７％

工夫と努力の情報コーナー

全回答者数　116名

	新教育課程の教育活動に取り組みながら抱いた悩み	悩み解消に向けた工夫や努力
	新しい学習活動（習得・活用・探究）へどう取り組むか	41名　35％
1		学び合いを取り入れた授業。
2	基礎・基本の確実な全員の習得が，なかなか実現しない。討論など，高度な言語能力の向上をめざすが，なかなか実現しない。	様々な自主研修に出たり，日々の教材研究に時間を確保したりして，授業改善に努めている。
3	習得はまずＯＫ。活用できるように授業の中に仕込むことは，時間的に難しい。（教材研究も難しい。）そして探究となると，ほぼ無理といった感じ。どう授業の中に取り入れればよいのか。学力（全国学テやウェブテスト，ＮＲＴなど）の数値のみを求められる現在の教育に疑問を感じる。	実生活と比べたりしながら，教科書の中だけではなく，生活場面に置き換えて考えることができるように心がけている。
4	算数授業の表現活動，言語活動。	ペアなどの話し合いに，必ず意味づけをするようにした。
5	児童同士の話し合い活動，検討場面をどのように工夫していくか。	学年主任，知育部主任の教師から，話を聞かせてもらったり，授業を見てもらったりしながら授業改善に取り組んでいる。
6	子どもたちがまだそこまで育っていないのに，思考・判断・表現の力を付け，その成果を求められたこと。	基礎となる力はドリル等で徹底的につけさせた。モデルとなる型や文を提示して訓練させた。よい場面をほめ，成功体験を増やした。他者評価を取り入れた。
7	学習課題の工夫（子どもの学修意欲が高まる。子どもがおやっと思う。やってみたいと思える。）⇒これにより，子どもの自己内対話を充実させること。話し合い活動の焦点づけ。	勇気のいることだが，できるだけ他の先生方に自分の授業を見てもらい，指導を受けて，翌日からの授業に生かしていくことを心がけている。
8	新教育課程の活動をどのように取り組んでいくべきなのか。	先進校や附属小の研究会に，積極的に参加した。
9	言語活動の充実が図れない。	先輩教師に聞く。
10	児童に既習事項を活用させるための手立てを考えるのが難しい。	学習のポイントを壁面に掲示している。問題解決に困っている児童がいたら，掲示物を見るように心がけている。
11	言語活動の重視。子どもたちがうまく説明できない。進んで表現しない。相手の意図をくみとりながら話せない。	場を増やす。間違えても笑わせない。易⇒難へ。学級づくりでコミュニケーション。
12	活動単元づくり。	同僚はもちろん，管理職も含め，全校体制で一丸となって取り組んでいく。
13	国語で言語活動を十分に考えるが，難しいことが多く，考えたようには実施できない。デジタル教材やパソコンを活用して，分かりやすい教材を考えるが，活用できる教材が少ない。	言語活動については，他教科や行事と関連しながら，時数に余裕をもたせながら効率の良い進め方を考えている。
14	新学習指導要領でいわれていることの内容を，授業レベルでどのように変えていくことなのかをつかむことが難しかった。	東京など，県外の研究会・研修会に自費で出かけ，情報を得るようにしてきた。

15	「言語活動」が新たに脚光をあび，従来の活動との差異や目指すものとの関連はどうあるのかなどを学び直す必要を感じた。	率先して講演等を聴いたり，書籍を呼んだりして学んだ。
16	問題解決学習を進める一方で，基礎基本の知識や技能をしっかり身につけさせることが大切であるが，１時間または１単元における時間配分のバランスが難しい。	知識や技能をしっかりと定着させるための時間を短時間でも日々確保していく。苦手な子が活躍でき，学習に意欲がわくような授業構成。「個人⇒ペア⇒「グループ⇒個人」などの形態による活動の工夫。
17	習得・活用で時数がいっぱいになり，探究に時間を割くのが困難。	軽重をつけた指導。計画性をもって授業に臨む。
18	習得，活用等々重視されるキーワードが示すものがどのようなものであるのか，各教科で具体的に指導を進めていくには，どのようにすればよいかについて悩んだ時期がある。	教科の特性によって学習活動そのものを活用と捉えることができるものがある。例えば算数は活用そのものである。このように捉え，基礎・基本の習得を活用の文脈で進めることはできないかと学習プロセスを工夫してきた。まだまだ改善が必要であるが，今後も研究に努めたい。
19	時数の増加で，以前より教材研究の時間がとれなくなった。研究授業は別として，日常の授業では，どうしても知識・技能の習得に重きが置かれる。	時間外の勤務でカバーしている。日常授業の流れにうまく思考・判断・表現力等の育成を取り入れるように授業改善していく。
20	算数に関して，高いレベルの内容（Ｂ問題的な）を取り扱うのが難しい。しかし，すべての児童が理解・習得できずそのまま次に進まなければならない実態がある。特に個別支援が必要な児童も，簡単には支援学級に入れられない。支援員・ＴＴもほしい。	・学習内容を要約したり，複数内容をまとめたりしたワークシートの開発，管理職をサブＴにした支援。管理職との習熟度別授業の実施。
21	児童一人一人が，課題に対して自分の考えをきちんともち，互いに伝え合うことを楽しむ姿を想像しながら授業をしているが，思い通りにいかないことが多い。	少ない時間ではあるが，教材研究の時間をきちんと確保し取り組んでいる。
22	思考・判断・表現の一連の過程を大切にした学習指導の構想を立て，実践した結果どんな力が付いたかを本人・保護者に伝え，自信につなげるところまでいかない。通知表も依然として知識・理解が中心で，要録とのダブルスタンダードになっている。	前任校では，評価の観点に合わせて，通知表項目を見直し，要録の評価への裏づけができるように通知表担当として学校体制づくりを整えた。現任校でも，保護者への啓発もねらって改善を提案している。
23	変化にとらわれすぎて，子どもが見えていないのではないかと不安になる。	子どもの記録をとり，目の前の子どもを中心に据えて，授業展開をするよう心がける。
24	量（指導内容）が増えていること。言語活動が，活動例に縛られている。	重点化。そのために，勤務時間外の研究・単元構成，新単元の創設，評価，そして次の一手を。
25	指導要領の目指す授業を実現すること。学力の向上（数値の向上）を求められるため，その点と指導要領で目指す学力をつけるための指導のあり方。	研究会等への参加。校内の教員との検討や協議。
26	研究主任として，自分の授業もそうであるが，他の若い職員の指導力向上を目指して何をすればよいか悩んでいる。管理職の方針が変わり，どの方向に進めばよいのか悩んでいる。	他の職員に相談したり，自分なりに方針をまとめて示したりしているが，なかなかやりがいを感じられずにいる。でも，できることを努力していきたい。
27	どのようなことに留意して学習指導を行えばいいのかわからない。	専門の先生に相談する。
28	職員の理解度の差を埋める。職員の差は，数倍になって子どもに反映される。	学力向上だよりの発行で周知する。授業研究を通して周知する。協議会や検討会に数多く出席する。全国学力調査の問題を職員が実際にやる。求められている学力を実際に感じる。

29	「活用」に注目が集まっている一方で，現場ではそれほど変化は感じられず，教職員間の温度差を感じることがある。	同学年，同分掌の先生方と，とにかく情報交換をこまめに行い，共通理解を図るよう心がけている。
30	学習内容が増えた。共通理解が難しい。	指導方法を工夫し，なるべく分かりやすく指導するように努力している。教科によって職員間の共通理解が難しいので，伝えるようにしてきた。
31	研究主任や教務主任として「言語活動の充実」を校内の中心として進める立場にあったが，「言語活動」のとらえが，職員間でまちまちで，共通理解を図りながら進めることが難しいこと。	書物や研修会等から，まず自分が「言語活動の充実　」に関する理解を深める。校内研修の中核に据え，授業研究などの具体的な場で少しずつ共通理解を図ることを重ねていく。
32	クラス数が多いと，学年で考えを共有することが難しいと感じることがある。	どの教科でも，子ども同士のかかわりの場を設定できるよう授業を組み立てようとしている。放課後などには，他のクラスの様子を聞いたり，自分のしたことを話したりして，情報交換を心がけている。
33	新教育課程に取り組んでいるという意識は無い。目の前にいる子どもたちに教科書の内容をどう教えていくか，日々考えていくのが現状である。新教育課程に対しては，授業時間が増えた，英語（外国語）が必修になった，理科・社会で選択の単元がなくなったということしか考えていない。	一人一人の子どものノートを見たり，個別に指導したりと，普通にやっていることばかりで，特に工夫や努力をしているという意識はない。
34	基礎・基本が定着しての「活用」だが，基礎・基本が定着しづらい子どもの数は，今も昔も変わらない。定着しづらい子どもにとって，活用は全く理解できないものである場合も多い。	
35	社会科等での問題解決学習を進めているが，学習内容の増加により，授業が遅れたり，計画通りにいかなかったりすることが多くなった。子どもの問いを大切にし，追求を子どもに寄り添いながら進めることで，学習意欲は高まるが，時間のない中，内容の定着（習得）に力を入れる時間が確保できていない。	定着を大切にすればするほど一方的な学習になりがちのため，家庭学習に位置付けてできるだけ楽しんでやれるように声を掛けたり，採点を工夫したりすることを行ってきた。ただ，学力差の充分な補充とはなっていない。
36	算数の進度が遅れがちだった。	計画を立て，授業では予定まで進めることを目標にした。また，予定通り進まないときは，取り戻すところを考えた。
37	言語活動の充実に努めたいが，努めていると他の活動が制限されてしまう。十二分にしないまま，まとめてしまう。心の指導に時間をとられていることが多い。軽重のつけ方が難しく，業者や県などのテストと合わないことがある。	家庭学習で補わせる。個別指導。
38	教える内容，分掌の仕事が多い。	効率的に処理する心がけ。
39	指導内容が増え，標準時数で進めていくことに無理がある。特に算数の時数がオーバーになってしまう。	分かる，できるまで指導したい。時数がオーバーしても他の教科がぎりぎり収まればＯＫなので，時数を増やしていること。授業時間以外に，学力の低い子に対して指導している。
40	言語活動を充実させるためにかかわり合いを重視してきた。結果として時数等がかかることが最大の悩みである。また，学力低位の児童の習得に時間がかかり，十分に活用力をつけられないことにも悩んでいる。	課題の吟味。かかわる場での支援。子どものかかわり方のスキルの向上。

41	新教育課程の悩みとして，本当に外国語が小学校に必要なのか，小の70時間で中学校以降に目に見える効果があるのか中学校担任の生の声を聞いてみたい。素人の小学校担任にできることは限度がある。	
	教材研究をする時間がない	24名　20%
1	授業についての研究の時間がない。	仕事の重点化を行うことで，時間を作れるようになってきた。
2	時間がない。管理職のパワハラ的な指導。	授業をまず優先し，この１時間で何をするかをシンプルに考えるようにした。教師間のチームワークを強める。
3	教える内容，分掌の仕事が多い。	効率的に処理する心がけ。
4	授業の準備をする時間がない。多忙。	学級経営の中での業務を精選している。（校内業務のスリム化がされないため）
5	教材研究，準備の時間がとれない。	自分の担当する会議は，支障のない限り短縮する。長くても40分でやめ，時間を確保する。
6	授業が終わるともう16時過ぎで，その後も分掌事務に追われる。その上，19時には帰るように管理職に言われるため，教材研究を学校で勤務時間内に行うことは，なかなかできない。	休日に学校に来て，平日の分を補う。家庭で可能な限りのことをする。学年内で互いに教材提供をし合ったり，指導法の共有をしたりする。
7	現行の学習指導要領の理念や目指す子どもの姿に賛成するが，それに向けた取り組みを行うための時間が，絶対的に足りない。職員間で話し合いや相談をしたいと思っても，事務仕事だけを終えるのに精一杯であった。	少人数で相談したり話し合ったりする場を設け，そこで考えたことや分かったことを学校全体に広げるように心がけた。しかし，その分遅くまで学校に残ることが多い。
8	思考力・判断力・表現力の育成を目指して，授業に取り組んでいるが，授業以外の仕事で時間をとられることが多く，十分な教材研究ができない。	自分の専門教科を中心に，軽重をつけて取り組んでいる。時間を生み出すために，朝早く出勤したり，家に持ち帰り仕事をしたり，休日に仕事をしたりしている。
9	以前に比べ，教材研究をする時間を十分に取ることができない。また，生徒指導上の問題や保護者の対応にエネルギーをとられ，探求的な単元を開発することが難しい。	予防的･積極的な生徒指導を心がけているが，子供化・利己化した保護者が多く，対応に苦慮する。
10	学習内容が増えたので，教材研究をする時間が必要になったが，校務分掌も増えていったので，なかなか時間をとることができない。	夜中まで学校に残ったり，休日出勤をしている。
11	学習内容が多い。教材研究をする時間がない。	学年で協力して，進め方を統一して共通理解を図っている。
12	小規模校なので校務が多くなり，教材研究の時間が勤務時間外になり，多忙感を覚える。	地道に教材研究する。調査や報告の期日を確認し，スケジュールの見通しをもつ。
13	教材研究を十分にする時間がとれず，納得のいく授業ができない。	寝る時間を削って仕事をする。
14	授業に対する情熱はあるが，日々，教材研究をする時間がない。	日々はなくても，放課後等に研修会に参加することで，学んだことを生かしている。
15	教材研究の時間が十分にとれない。	夏季休業日・冬季休業日・週休日・祝日等に行っている。

16	ほぼ毎日６時間授業をし，会議等があると十分な教材研究をする時間は，ほぼとれないような状態である。	家庭での時間の使い方を工夫し，時間をとるようにしている。
17	教科書教材が変わると，先行実践が少なく，どうしても教材研究の時間が不足してしまう。	他の職員と協力しながら，よい実践があれば紹介したり紹介してもらったりして多忙化解消に努めた。
18	会議は多く，放課後の職員の活動は多いが，純粋に教科学習にあてる時間が少ない。教育課程の概念はよく分かるつもりだが，同僚と議論する場や分かち合う場が少ないことが悩みだ。子どもを帰すと午後４時半，４時45分の退勤までに何ができるといえるか。	学びとは，効率の良い環境があればできるものではないと考えている。しかし，教材開発では，インターネット等の活用で先行事例を使うことがある。（１）子どもが能動的に追求する（食いついてくる）課題を提示すること（２）連続した問いが発するような課題を自分自身が見つけ出していくこと（３）子どもの“なぜ”を大切にした学習展開をすることに心がけている。
19	教育課程の悩みとして，本当に外国語活動が小学校に必要なのか疑問だ。小の２時間×35で，中学校以降に目に見える効果があるのか。中学校担任の生の声を聞いてみたい。素人の小学校担任にできることは，限度がある。	やるしかないので，がんばっている。心底から，本当にがんばろうと思う。資料，根拠，指導基準が欲しい。レベルアップしなければ意味がない。
20	外国語活動の授業について	中学校区合同で研修をして負担を減らしたり，市教委の英語指導室の先生に相談したりした。
21	学校規模によっても異なるかもしれないが，児童にかかわる時間，教材研究に費やす時間が，十分に確保できない。	学校全体で会議を減らし，時間確保に努めている。
22	時数を守って授業を進めることが困難である。分掌の仕事が多く，教材研究がなかなかできない。	ポイントを絞った授業をする。市販されている書籍・教具を使った授業。
23	外国語活動の教材研究をする時間がもてない。教科担当制が望ましい。	過去の教材をストックしておき，繰り返し使えるようにしている。
24	授業が終わるともう16時過ぎで，その後も分掌事務に追われる。その上，19時には帰るように管理職に言われるため，教材研究を学校で勤務時間内に行うことは，なかなかできない。	休日に学校に来て，平日の分を補う。家庭で可能な限りのことをする。学年内で互いに教材提供をし合ったり，指導法の共有をしたりする。
教員はここまで多忙		16名　14%
1	年々現場は忙しくなり，一日のほとんどを仕事に費やしているように感じる。それなのに，次から次へと様々な取り組みをするように行政から言われ，このまま仕事を続けられるだろうか。体力がもつだろうかと心配だ。子どもを取り巻く家庭環境も様々で，対応が難しい。	とにかく，一つ一つをこなしていくだけだ。
2	授業以外の調査・報告が，とにかく多い。	夜遅くまで，残業手当もないのにサービス残業，または家での持ち帰り事務。
3	学級担任，学年主任としての仕事には，やりがいを感じているが，校務分掌に追われて自分が満足できるように今一できない。個人情報の関係で仕事を持ち帰りにくくなり，自分の子育て家庭との両立が難しい。	とにかく仕事を効率的にこなす。教材研究など，個人情報にかかわらないものは家でやる。

4	やることだけが増え，減るものがほとんどない。何か一つを選ぶときに何か一つを減らす覚悟を教育行政や管理職にしていただきたい。何人もの管理職にその旨を話しても「自分の決断では…。」とにごしたり，「何かと何かを組み合わせて合理的に…。」と言うが，それでは何も変わらない。トップの方に決断してもらわなければ，私たち現場は誰にたよればいいのか。	様々な場で同じ話をしている。また，合理的に進められるよう学年部や学年，校長とも相談している。（アンケートをとったから終わりではなく，この声をぜひ今後の活動に生かしてほしい。すべては子どもたちのためにがんばるつもりだ。）
5	とにかく多忙であわただしい。時間がほしい。	
6	担任一人で何でもやるのには限界があると感じている。担当教科において，教材研究を一からやる必要がある単元・教科があったので，大変，時間が足りないと感じた。（特に国語）空き時間が少ない上に，放課後も十分な時間がとれない（子どもの下校は，４時頃のため）ので，残業して教材準備，校務分掌の仕事をしなければならないことが多い。勤務校では，級外の教員も授業に入るのは教頭・教務のみなので，マンパワーも不足気味である。「活用」「探求」に重点をおいた授業を目指すには，時間も人も不足していると思う。指導内容が増え，各教科で表現する活動が増えるのは，難しいと感じている。（不登校やトラブルの多い子の対応にも時間を多く使っている。）	「活用」「探求」などをゴールとする学習や活動を行う教科や単元を限定して行っている。高学年だと，学校行事などにかかわって時数が必要になることがあるので，朝学習や休み時間，給食準備中なども使って，できるだけすき間の時間に指導したり説明したりしている。子どもたちが学校にいる間は，一秒たりとも無駄にしないようにしている。
7	とにかく時間がない。学級の子どもと過ごす時間がない。家に居場所がない。朝は早く夜は遅いため，家族にほとんど会わない。	家族に理解してもらえるよう家事を担当しつつ，私的時間を削って校務に専念する。校務をこなす量は減らないので，効率アップと軽重をつけた取り組み。
8	総合学習や外国語活動が取り入れられる一方，主要教科の基礎・基本の定着や，Ｂ学力といったことにも力を入れていかなければならない。社会体育等の習い事をしている子どもが多く，疲れている様子がある。	
9	仕事は増えていく一方で減ることがない。⇒学習が充実したものにならない。子どもたちも，テストが増え学習意欲は高まらない。	算数の板書計画を毎時ノートに書くのを続けている。国語辞典を２年生から使えるように指導している。
10	時間の確保。	遅くまで残って仕事。土・日に出勤して準備する。
11	日々の教育活動に追われ，悩みというより多忙感が増している。	一人で悩まず，職員間で相談し，悩みをため込まないようにしている。
12	時間が足りない。勤務時間を過ぎて仕事をするしかない。	工夫できていない。土・日もやるなど。
13	学級担任の役割が多すぎるのではないか。本当の探究の時間などできるのか。総合と社会，総合と国語，弾力的なカリキュラムがかえって混乱を招き，どれも中途半端にしている。	悩みの解消など，一人のエネルギーではどうにもならない。同僚と愚痴を言ってストレスをためないようにする程度。根本的解決など不可能。とにかく教員をたくさん増やすべき。30人以下学級を実現すべき。
14	日々やることが多く，多忙である。じっくりと仕事ができない。教育に掛けるお金が少ない。（教員数の不足。施設・設備の不備）	やるべきことの優先順位をつかて，早めに仕事をこなしていく。
15	多忙である。	
16	時間の効果的な使い方，有効な時間運用の仕方。校内行事の進め方，計画の仕方。無理なく，負担感なく，子どもに有意義な行事のあり方。	諸先輩から学ぶ。参考書の実践。職員会議での積極的発言。計画の見直しを常に複数の視点で行うこと。

児童間の学力差が広がる		14名　12%
1	児童一人一人の学力差，意欲の差が広がってきているように思う。クラス全体の学力向上は当然のことではあるが，一人一人に確実に力を付けさせたい。	指導法の工夫（その子には，どんな教材や教え方が合っているのか。）Ｔ・Ｔなど，少人数担当者との協力。（よりよい指導体制をどう組むべきか。）
2	学習意欲の低い子どもに学習の楽しさを教えること。	個に応じる。（分かるところまで戻る。下がる。）称賛する。
3	特別な支援が必要な子が多く在籍するクラスでの学習指導をどのように進めるか。	多くの教師が，チームで支援していくこと。
4	学習内容の質と量が増えたため，指導しきれない部分もある。また，理解の速い児童と遅い児童の二極化が進み，差が広がっていると感じる。	教材研究と授業改善に努めるしかないと感じている。限られた時間なので，どれだけ授業の密度を濃くできるかが大事。そして，授業の中で，すべての子どもに力を付けさせることを基本的な考えにしている。授業の進め方は，学年部でよく情報交換しているし，校内の詳しい人にも指導方法を教えてもらっている。
5	学級内での学力の二極化が，年々顕著になっていること。あまり得意でない教科の指導に苦労している。	
6	学力差が大きいこと。習得に大変時間かかかる。あるいは，学年相応の内容まで到達するのが難しい児童が多く，活用まで行き着かない。	基礎・基本の習得に力を入れている。学力差のある児童用に，異なる学習プリントを用意する。個別指導。
7	いつも学力の低い児童への個別指導など底上げだけを考えず，学力が高い児童もみんなが楽しいと思える授業にしたい。理想的ではあるが，いざ授業するとなると，その課題や教材選びなど時間とアイディアが必要になる。	研修会に参加して，いろいろ先生方の実践を学ぶ。
8	算数の授業で学力差が激しい。	学力が高い子に難しい問題をやらせる。
9	児童間の学力差・意欲差が大きく，下位の子は勉強に対して無気力になることがしばしばある。進学の壁もほぼなく学習の必要性を感じていない。家庭環境も落ち着かない現状がある。	
10	一人一人の子どもたちに確かな学力を身にけさせたいが，学力差，家庭を含めた家庭学習に対する意識の差が大きくて，なかなか成果が見える形でつ上がってこない。	「算数に重点を置き，図、式，操作，言葉等を用いた表現や問題解決を継続して指導する。
11	学力差が大きい。家庭間の差が大きい。	休み時間に補充。単元の初めの段階で始めて，毎日行ってきた。日頃より，保護者とのやりとりをしている。関心のない親もいるので，～さんが困っています。～さんがよくなるようになど，子どもも困り感を連絡帳や電話で言ってきた。
12	学力差が大きいこと。習得に大変時間がかかる。あるいは，学年相応の内容まで到達するのが難しい児童が多く，活用まで行き着かない。	基礎・基本の習得に力を入れている。学力差のある児童用に，異なる学習プリントを用意する。個別指導。
13	すべての児童の学力の保障。	個別指導。児童同士の教え合い。
14	今年，１クラス17人の２年生を受け持った。おととし，34人の２年生をもった。今の17人の方がずっと学力も高く，偏差値は有名校並みで，生徒指導上も問題なし。	やはり，少人数学級がどの学年でも実行されれば，日本の学力は上がると思う。40人制など，とんでもない。

	授業時数が足りない	11名　9％
1	授業に力を入れれば入れるほど,時間が足りなくなる。	「教え・考えさせる」の視点から，教えるところはスパッと教えるように割り切って考えることで，時間の確保はできるようになってきた。
2	高学年担任をすることが多いため，行事の準備等教師の下請け的作業で授業時数を削られ，子どもたちは忙殺されている。	子どもの様子，学習実態について管理職との話し合いを求め，教育課程の整理と整備を強く求めた。
3	学力向上に向け，すべてに一生懸命に取り組むと，どうしても時数が足りなくなりがちである。	単元・題材によって軽重をつけることで，無理のない教材研究や準備ができ，評価もしっかりできる。
4	時数不足。内容が多く，一つの学習内容をしっかり指導することができない。	授業の中で,必ず押さえるところを精選して,時間を効率よく使えるようにしている。
5	やりたいこと，目指していることは，理解している。しかし，物理的に時間が足りない。	これまでと変わったところに対応すべく，これまでの取り組みで改善すべきところを改善する，必要ないものは削るなどした。（分掌の範囲内）教科・領域等の横のつながりなどを意識して，職場の人数で，できる限り効率的になるよう努めている。
6	指導時数の不足。	教科書の内容を組み直し短時間で基本的な内容を学習できように提示する課題を工夫している。
7	教科書どおり進めると，終わらない。	単元の中でも軽重をつけて指導する。
8	授業時間が不足している。	単元に軽重をつけている。ただ判断に困ることが多い。
9	内容が増え，やろうとしていることは理解できるが，それをする時間が無い。考えさせたり，それを表現させたりすることを全員に保障しようとすれば時間がかかる。内容が終わらなくなる。また，外部のテストが多すぎる。そのために時数が削られる。習得の時間すらとれない。本末転倒である。	可能なものは，朝学習・宿題の時間で対応。外部のテストはやるが，それを生かすために時間はとれないので，日常の授業の中で少しずつ生かす。でも苦しい。
10	学校行事との関係等で，授業時数が確保できないことがある。	指導事項を精選したり，単元指導の軽重を図ったりする。
11	算数の学習内容が年間指導計画どおりに進まず，遅れがちになる。低学年は時間に余裕があるので大丈夫だが，中・高学年を担任した時は時間が足りず，十分な指導ができなかった。	遅れを取り戻すために，他のクラスのベテランの先生に進め方を教えてもらった。
	学力数値目標の重圧	4名　3％
1	「学力向上が喫緊の課題である」と強く主張されるが，それに取り組むための時間的･精神的なゆとりがない。また，数値を上げなくてはというプレッシャーが大きい。（全国学テ，Ｗｅｂテスト，学習指導改善調査）	時間がない中で授業の質を高めていくために，市販の参考書を複数購入してまねをしている。身銭を切って中央の研修会・研究会に参加し，よい授業のイメージをつかむ努力をしている。学年・学校体制で，各種テスト対策に臨んでいる。

2	学力テストによる様々な問題が起きている。Ｗｅｂテスト，サポート問題，学習状況調査，ＮＲＴなど一つ一つの調査は実施するだけでなく，間違いの訂正とさらに習熟と定着，教科も理科が加わった。校内テストも実施されている。毎日がテストで追われている。	学級担任の工夫や努力ではどうにもならない。精選を切に願っている。
3	数値目標を設定し，目標を達成することを強く指導される。そのため，過去問，アシスト問，サポート問など，繰り返し実施する。結果，子どもたちはテストなどの解答は書いているが，それが学力の実態を反映しているとは思えない。では，子どもが楽しみながら興味をもって取り組める課題設定をと思うが，目標を達成する学習と関心を高める学習が乖離しているのが実状である。	悩みは解消されていない。悩みは持ち続け，目標を達成するためにドリル的学習を繰り返し，一方で関心を高める学習を設定している。しかし，両立させるためには時数が足りない。朝学習，終会，昼休み，放課後に補習を実施しなければ目標は達成できない。特に，低位の子どもには，つらい学校生活となっているのではないか。
4	これまでとやっていることは変わらないのであるが，Ｂ学力や学習改善調査問題がかなり難しくなっている。そのための学習方法もあるような気がするのだが，それと学習指導要領で求められているものが一致しているのか，今ひとつ分からない。	過去問題に取り組んで，学年全体でやらせて，力を上げるように努力している。
そ の 他		８名　７％
1	学級の児童数が多い。35人以下学級の実現。	
2	特別支援教育への実践的な対応	自分より技量が上だと思う人を見つけて，自分の授業を批判してもらう。
3	児童が変わってきて，生徒指導的な配慮がこれまで以上に必要である。	教材研究，授業準備。支援の必要な児童に合わせた対応。授業における生徒指導，社会性，自立性を培う学習の導入。
4		自分の中で何をどうすべきかイメージをもち，行動パターンを作ることによってストレスを減らしている。
5	学年でつけるべき学力がついてない。	前の学年までさかのぼって指導しなおす。
6	心の広い管理職が多くない。	努力しても理解されることが少ないので，あまり意欲的に対話をしようとはしなかった。
7	地域間の格差が非常に大きい。学力向上に取り組みましょうと言っていながら，他の行事に忙殺される上越の現状と各種大会を廃止している下越の現状のギャップに疑問を感じる。地域の特色とは，他の面ではないか。	他地域教員との連携や情報交換。
8	前年度，学級崩壊していた学級や，その中心となった児童やいわゆるモンスターペアレントのいる学級で，もち手のない学級を担任することが多くなった。前年度学級崩壊していた学級の場合は，学力差とともに人間関係の修復などを考えた授業をしていかねばならない。先進校，研究校のような射程距離の長い問いや学習活動では，学習が成立しにくく，リズム・テンポよく射程距離を短くした授業の方が効果的な場合がある。しかし，このような授業は軽んじられ，低く見られがちである。「教師主導」，「手品型授業」とのレッテルもある。それが必要な場面があることへの理解を得にくい。	立て直しの事実を見ていただく。射程距離は少しずつ長めに設定して，市・県・国に求める授業の形に近づけていく。その上で，これらのプロセスを主張していく。